

当事者の手で 自助のご近所づくり

住民流福祉総合研究所

木原 孝久

- ①福祉の出発点を「自助」にする。
- ②住民は皆、自助から始める。
- ③福祉活動の起点をご近所とする。
- ④ご近所で住民は自助から活動を始める。
- ⑤住民の中の当事者が「自助のご近所づくり」を牽引する。
- ⑥当事者意識を持った住民を「当事者」とみなす。

目次

序章 活動者から当事者へ、主役交代／5

第1章 当事者がつくる福祉の特徴／11

- 1.当事者である私が主役
- 2.当事者はご近所圏でご近所流の福祉をつくる
- 3.当事者の「助けられ」行為も福祉活動と認定
- 4.助け手確保のため「攻めのおつき合い」へ
- 5.自助型の新しい助け合いを創り出そう
- 6.受け手側としてやるべきことを実行

第2章 当事者がつくるご近所福祉／48

- 1.足元に身を守る「安心エリア」をつくる
- 2.自分の福祉サービスは自分でつくる
- 3.庭木の剪定技術等の人材情報のネットをつくる
- 4.当事者側から自助型の地域福祉活動づくり
- 5.世話焼きさんの発掘が最大の課題
- 6.子どもの近居・遠居ーもっと頼りになる資源に…

第3章 住民と当事者の違いは？／76

第4章 当事者によるご近所づくりーどこから始める？／81

「他人にやさしく」でなく「自分にやさしく」から始めるご近所福祉

序章 活動者から当事者へ、主役交代

「助け合いのまちづくり」ということがよく言われますが、その意味するところは、やさしさが溢れるまち、ということでしょう。やさしさが溢れるということは、みんなが他人にやさしくなるということ。つまり「助け合い」と言う時も、私たちは、福祉とは「元気な人が困っている人を助けること」だと考えているのです。

(1)自力解決と助けられ上手ができればいいことだ

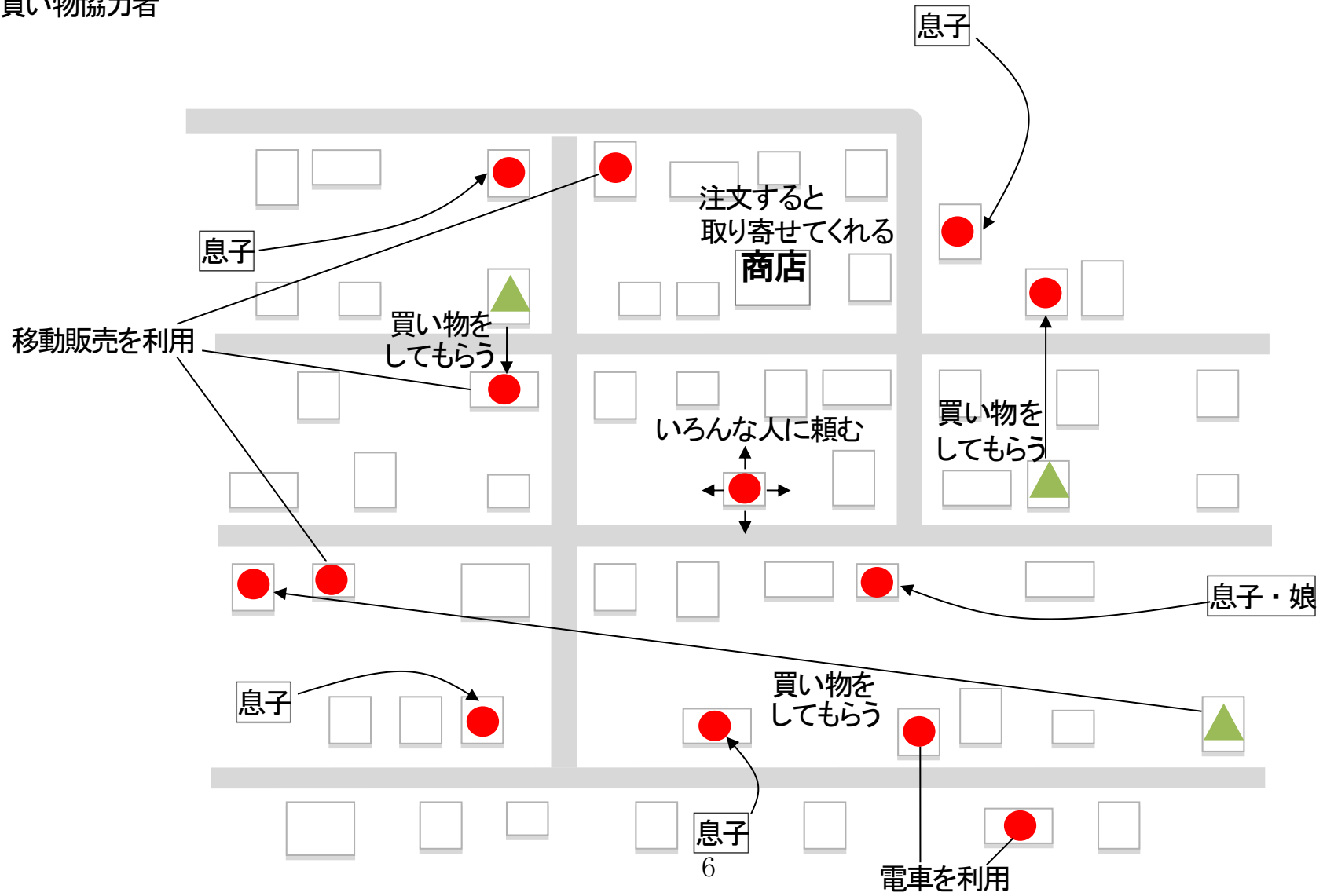
これを「自分にやさしく」に転換したらどうか。福祉のご近所づくりといっても、要は1人ひとりがしっかり自分を大事にすれば、それである程度、目的は達せる。自分を大切にすることは、必要な時は人の助けを求めることも含まれる。まずそれぞれが自分の問題解決に取り組み、必要な時は他者に助けを求める。これがきちんとできれば、そんなに助け合い、助け合いと叫ばなくてもいいのだ。

(2)求められたら自助活動のおすそ分けをすればいい

だから、助け合いといっても、改めて組織を作り、会議を開き、要援護者を特定し、問題の解決策を話し合い、一斉にみんなで

● 交通(車)に不便をしている一人暮らし高齢者

▲ 買い物協力者



行動を起こす、といったことは必要ないのだ。お互いが普段の生活を送りつつ、困ったら他人の助けを求める。求められた人は、求められただけのことをやればいい。それを組織的な活動にする必要はない。おのおのは自助を追究する、そして求められたら自助活動のおすそ分けを行えばいい。それぞれの自助活動の不足分を補い合うのだ。

(3)ご近所という圏域で自助の助け合いは、既にやっていた

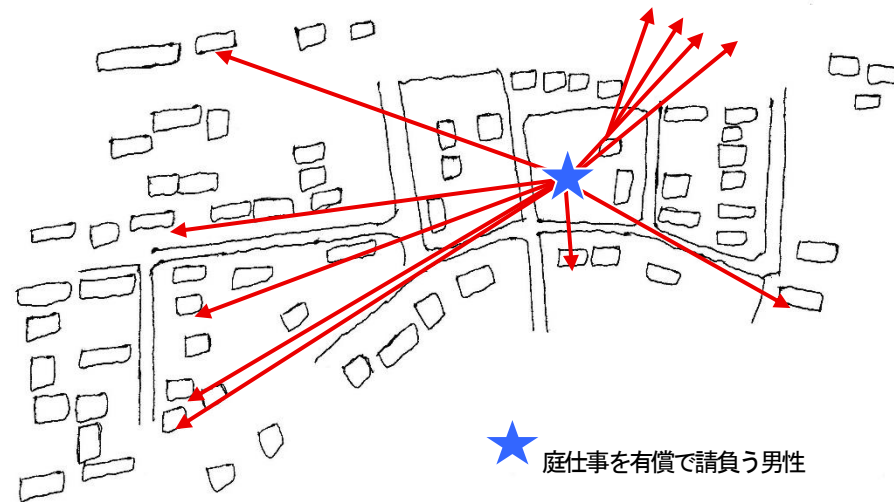
といっても、じつはそんなことは、すでに当人たちが実践している。前ページのマップを見ていただきたい。これは、車を持たない一人暮らし高齢者はどうやって買い物をしているのかを調べたものである。ご覧の通り、10数名のすべてが、自助や助け合いによって買い物ができている。子どもに頼んだり、同じ一人暮らし同士で助け合ったり、ご近所さんに頼んだり、さまざまだ。

このマップを福祉関係者に見せると、「面白いですね」と言って写真を撮る。当事者がこんなに盛んに助け合いをしているとは思っていなかったからだ。考えてみれば、助け合いをやっているのは当たり前だ。彼らは一人暮らしで車がないのだから、間違いなく買い物に不便をしている。だから、何らかの対策行動を取っているはずなのだ。当たり前の行動を、そう思えなかったのは、当事者は受け身の存在であって、こうした問題解決の行動を取っているとは思っていないからである。

(4)一人が見つけた庭木の剪定の技術者を11人が利用、この情報普及力は何だ？

もう1つ、次のマップは、庭木の剪定で困っている一人暮らしの高齢女性たちが、定年退職後にこの技術を学んだ男性を、上手に活用しているというものだ。別に誰かがこの男性のことを知らせ回ったわけでもない。彼が庭木の剪定ができて、一人暮らしの

女性に若干の有償でやってあげているという情報が当事者の中で広がって、それを知った人たちが「私も」「私も」と殺到したということなのだ。普通なら特定の団体がこれを情報化して、意図的に普及させるものだが、そういうことはだれも何もしていない。彼との交渉は当然、個々の当事者が行っているから、謝礼のあり方や額なども、1人ひとり全部違う。意図的で組織的な活動が全く行われていないのに、小さなご近所の中の多くがこのサービスを活用している。



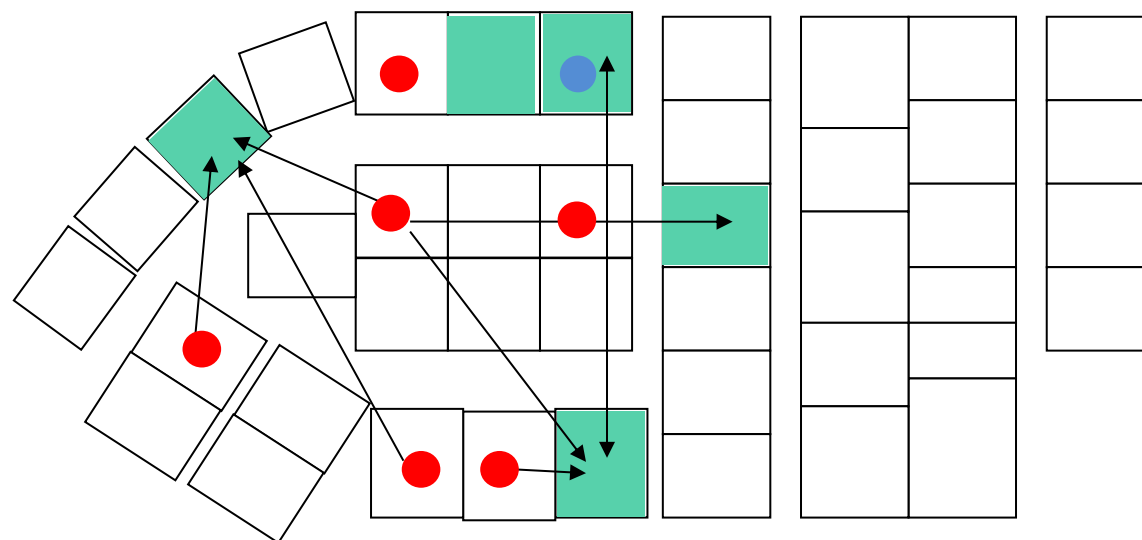
ここでは矢印は活動を提供している男性から依頼主の方に向かっていているが、正確には逆かもしれない。1人ひとりが自分の福祉の主演として行動している、と理解すべきなのだ。

(5) 同じ手法であらゆる困り事が「私も」「私も」の発想で解決してしまう

庭木の剪定だけでなく、例えば送迎の人材、食事作りの人材、介護技術の資格保持者、建物の補修の技術を持っている人がいたとすれば、同じ手法が使える。その情報が当事者の中で共有されれば、いろいろな問題が解決できる。

たとえば右のマップは、いま家庭介護をしている人を、足元のOBたち、つまり介護経験者がサポートしているというマップだが、じつはこの中の青い丸印の人は元看護師で、加えて優れた世話焼きさんであった。彼女から聞き出したのだが、この集落のみんなが、彼女に健康づくりや保健関係の相談にのってもらっているようである。

また、この集落には、建物の補修とかペンキ塗りなどの技術を持っている男性もいて、この人もまたこの集落の多くの家の補修やペンキ塗りなどをやってあげていた。



■ …介護中の家庭(線は関わる人)。介護経験者●がサポートしている。
●は元看護師。

(6)当事者仲間が抱えている問題の解決策を考えるのが先決

ここまで述べてきたことから、「自助の助け合い」で何をするのかが理解できたことだと思う。一般的な福祉のまちづくりのように、まずその地区の福祉課題は何かとか、要援護者はだれで、その人にどんなサービスを提供したらいいのか、などと福祉概況を点検するといったことはしない。

まず何を置いても、当事者1人ひとりが今、具体的にどんな困り事を抱えているのか、それに対し当人はどういう対策行動を取っているのか、その上でご近所内の誰に何をしてもらおうとしているのか、何をしてもらいたいのかなどを確認したうえで、本人の希望に沿って対応を考える。

その場合に責任者を決めて、その人に問題と対策を集約するのではなく、それぞれが相談しやすい相手に働きかける。ただ、相談相手がないような場合は、緊急避難的に特定の人物が受け止めるといったことはあるだろう。

(7)問題ごとの解決策などをプールしておく。他のご近所ともアイデアや情報の交換を

あまり役割を決めてはよくないが、例えば特定の課題に対しての解決策を皆で話し合ったり、皆の実体験を披露してもらいながら、解決策のアイデアを蓄積していくのもいい。それぞれのご近所のアイデア集を交換したらいい。

当事者がそういう作業をこなすのが大変ならば、ご近所内の世話焼きさんとか、サポート役の人たちをお願いしてもいい。こういう情報が蓄積されるほど、仲間の問題の解決力は強まるのだ。

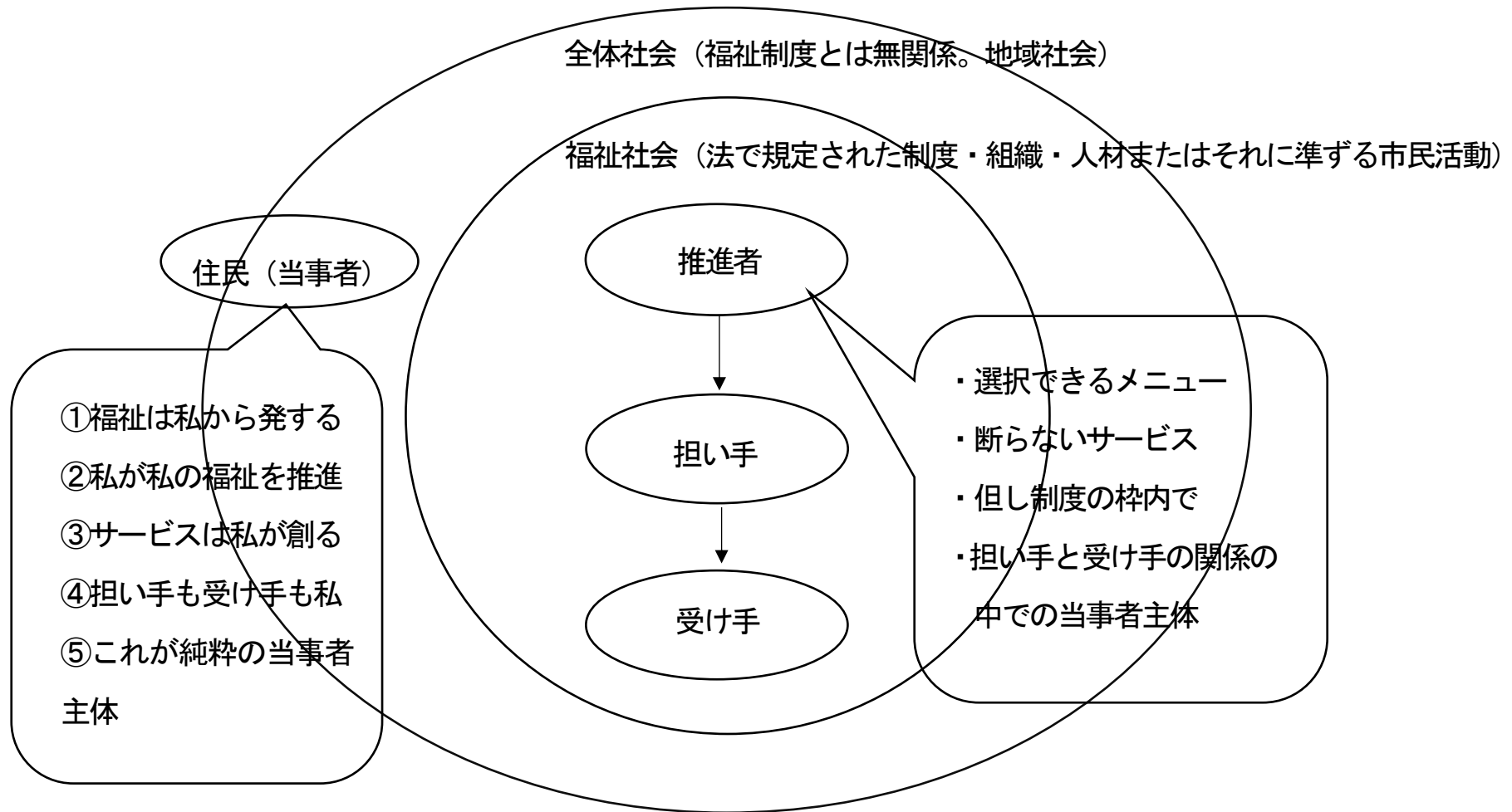
第1章 当事者がつくる福祉の特徴

1.当事者である私が主役

(1)福祉社会の「当事者主体」と全体社会の「当事者主体」

ところで、福祉関係者はよく「当事者主体」という言葉を使うが、そこでの当事者主体というのはどういうことなのか、はっきりしない。どうやら2つの意味があるようだ。1つは、サービスを選択できる、あるいは、そういうサービスはできませんと言わない。もう1つは福祉の主体者としての意味だが、そもそもサービスを提供するという構図そのものが、担い手と受け手の関係を前提としており、その受け手にどんな権利を賦与したところで、担い手と受け手というタテの構図の枠内にあるのだから、限定的な主体者でしかない。

一方、本書で言っている当事者主体では、福祉を行う人自体が当事者なのである。対象になる人も当事者だ。両者は一体の場合も多い。サービスという概念も認めていない。サービスがあるとすれば、それは当事者が自ら創り出すものなのだ。それに担い手と受け手という構図そのものの存在を認めていない。



(2)全体社会で「福祉は私が創る」と言っている人が本物の主体者だ

前ページの図を見ていただきたい。福祉に関連して、2つの社会があると思っていただきたい。1つは福祉社会。福祉にかかわる人々の営みは、法的に規定され、それに従って、各種のサービスが作られる。まず推進者が決められ、次いで担い手が選ばれ、この人たちが要援護者へのサービスが提供される。住民の「福祉」活動も、こうした制度に準じて実践されている。

この福祉社会では、サービスを選べるとか、サービスを断らない、というあたりが当事者主体に相当するという。

さて、もう1つ、一般社会がある。これを全体社会と言ってみよう。先ほどの受け手、つまり要援護者は、この全体社会にもいる。彼らの福祉のやり方はこうだ。①福祉は私から発する。②私が私の福祉を推進する。③サービスは私が自身で創る。④担い手も受け手も私ということもある。この人は、前掲の福祉社会の支配を受けない。だからそこで設けられている担い手と受け手の関係からも自由である。⑤これが本当の当事者主体ということだ。

「福祉社会」で仕事をしている人は、当事者というものは、推進者→担い手→受け手の関係で縛られている人だと思っている。だからその中で、せいぜいサービスを選べるといった程度の主体性しか認められていない。「全体社会」で自由に動き回り、福祉は自分から発する、福祉の何たるかは私が考える、私の困り事の解決策も私が考えると考えている本物の当事者がおよそ存在することも考えていないかもしれない。しかしこういう人は現実に存在する。そして今言ったような考えを持ち、行動しているのだ。

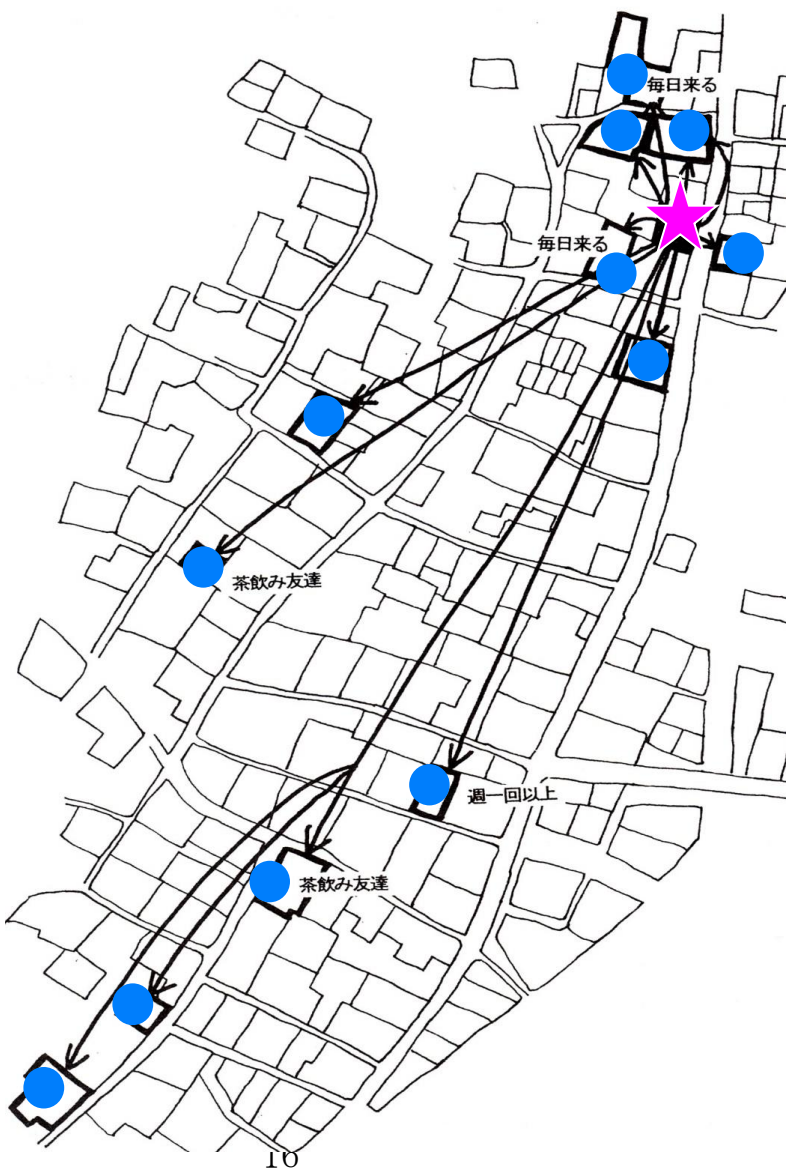
彼らは主としてご近所で行動している。彼らの実態を掴みたければ、ここで支え合いマップとか自助マップを作ることだ。その中から、ちょっと変わった行動を取っている人を見つけたら、その変わった行動の中に彼らの主張が詰め込まれていることが多い。

(3)あちこちの家に押しかける人。本人にとっての「デイサービス」かも

長野県のある市で、かなり変わった行動をしている人を発見した。高齢の女性が、あちこちの家を訪れている。それも、朝の5時といった時間帯にである。朝5時の訪問客と言えば、普通は何か不幸が起きた時だろう。ところが、玄関を開けたら彼女が立っていて、「ぬかみその作り方を教えてくれ」などと言う。それなら昼間に来たらどうかと言うと、今知りたいと言うのだと。

断ると悲しそうな顔をするから、断れない。それに、後でちゃんとお礼の品物を持ってくる。こうした彼女の訪問を受けている人が13人もいた。皆、迷惑だとおもいつつも、黙って受け止めている。

じつはマップを作ると、こういう奇妙な行動をする人がどこのご近所にもいることがわかる。まわりは迷惑な人だと思っているが、本人は真剣だ。それぞれ何らかの理由で、こういう行動で安らぎを得たいと思っているようなのだ。銭湯に来ては、お客さんが脱いだ服をたたんでいる認知症の女性もいる。それをするとなぜか落ち着くらしいので、皆やらせてあげている。これを本人にとってのデイサービスと言ってはダメか。各自で自分がいちばん安らげる方法を考え、実践していると思えば、分かり易い。まわりはちょっと迷惑でも、それを受け入れてあげれば、それだけで立派な福祉になる。後でも説明するが、住民にとって最良の福祉サービスは、自分が作るものなのだ。



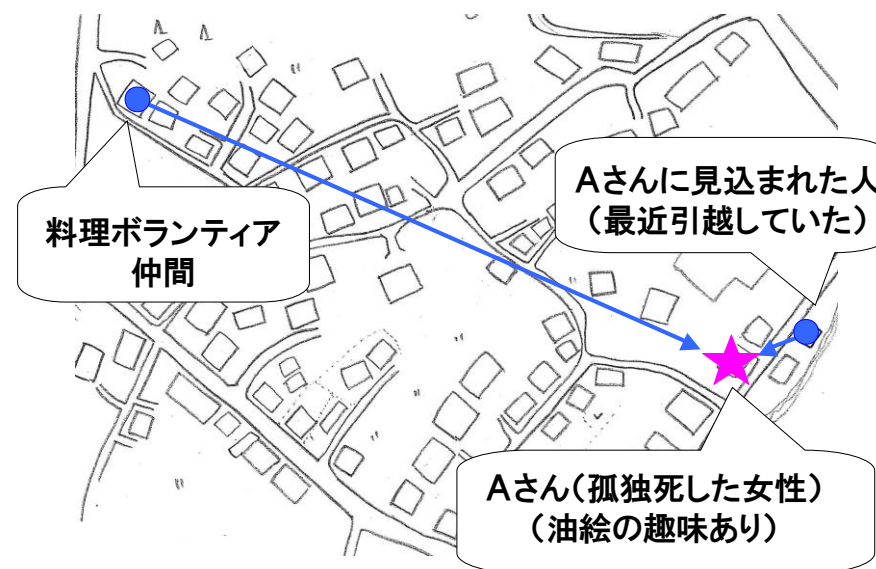
(4)「見守り」活動で当事者主体とは？

ここからは当事者主体とはどういうことかを「見守り」を例にとって説明していこう。

①私を見守る人は、私が指名する

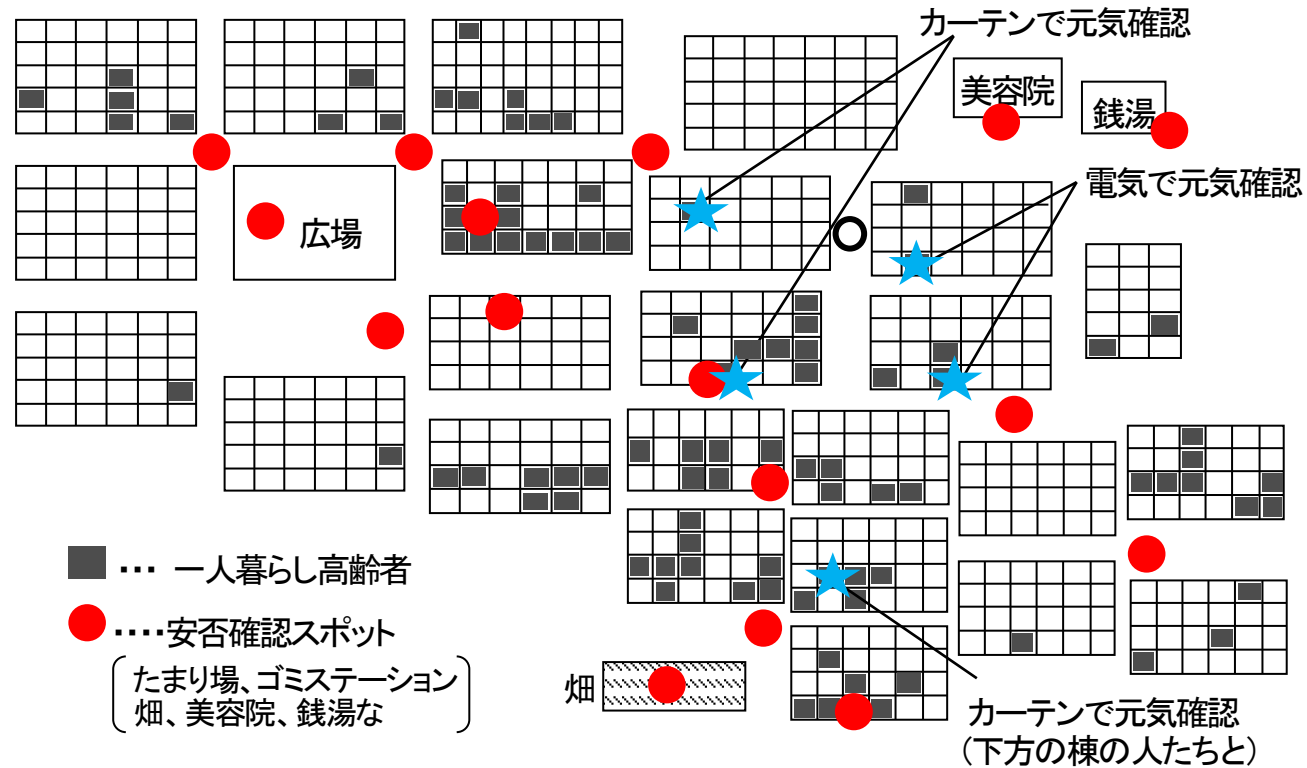
死後1週間で発見された一人暮らしのAさん。民生委員や見守りボランティアが訪れてもドアを開けなかった。「どんな引きこもりでも、2人や3人には門戸を開けるものだけど…」と確かめたら、「そういえばBさんとCさんは受け入れていた」。特に斜向かいに住むBさんには「何かあったらお願い」とまで言っていたという。

ではなぜ孤独死になったのか。Bさんが最近、引っ越していた。もし民生委員が、自分が受け入れられないことは脇へ置いて、本人がだれを見込んでいるかを探せば、Bさんを発見できていただろうし、Bさんが引っ越すときに引き継げたら。本人の意思を大切にしておけば、孤独死も防げたかもしれないのだ。



②一人暮らしの見守り体制は自分たちでつくる

下のマップは、地方都市の築数十年という公営住宅。黒印は一人暮らし高齢者。白い部分の多くは空き部屋だ。福祉関係者が「よほどたくさんのお手を養成しなくては、間に合わない」と嘆いていた。そこで、ここに住む一人暮らし高齢者に、安全確保策を尋ねてみた。



■特に気になる人は一人暮らしのリーダーたちが自転車訪問と電話訪問で

「私は向いの〇〇さんと、夜、電気がついたら大丈夫としている」「私は向いの△△さんと、朝カーテンが開いたら元気と…。一人暮らしの人が集まる部屋も、棟ごとにあった。その他にも彼等が安否確認（し合うための）スポットがあちこちに。特に気になる人は、一人暮らしのリーダーたちが自転車訪問と電話訪問もしていた。

当事者どうしの助け合いは、ご近所だからこそやり易いということがある。数百世帯の自治区のように広くなると、日常接する機会が少ないから助け合いようがないのだ。

■これからは一人暮らしの人たちで一人暮らしの見守りシステムをつくってもらおう

普通は、こういう見守り活動への参加者は、ほぼ全員が見守りを必要としない一般の人である。気になる人への電話訪問や自転車訪問も健常者である。ところがこの地区の場合、活動の参加者は皆一人暮らしの人である。

これから一人暮らしの高齢者がさらに増えるのだから、彼らの手で見守りシステムをつくってもらったらどうか。今のように、個々の見守りとシステムとしての見守りがあるとしたら、熱意のある人は両方に参加してもらおう。こういうやり方が広がっていったら、見守り活動というのはどのように変わっていくだろうか。

■同じ一人暮らしの超大型世話焼きさんが活動を引っ張っていた

もう1つ注目すべきは、この活動のリーダーも一人暮らし高齢者で、しかも超大型の世話焼きさんであった。この人がグループ

をグングン引っ張っていた。他の事例でもやっぱり、いい活動は世話焼きさんが引っ張っていた。それも、ちょっとそこらには見当たらない優れた世話焼きさんなのである。

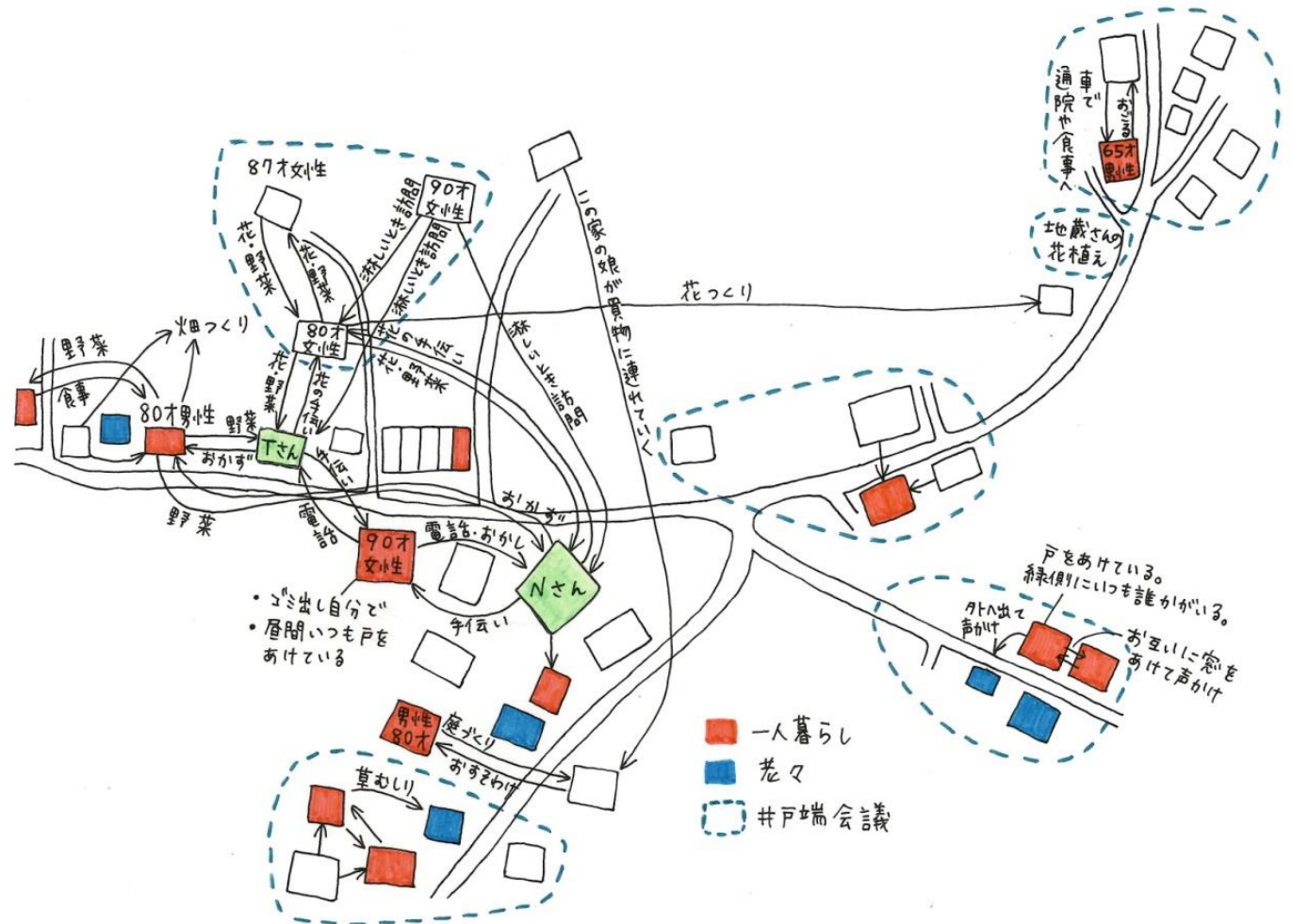
自助の助け合いのメリットは、他人ごとにならずに本気で考えられるという点であろうが、逆にデメリットは、やはり要援護者であるという点である。そのために、普通の世話焼きさんより、もっと強く皆を引っ張っていくエネルギーのある人物が求められるのだろうか。しかも1人ひとりのメンバーにきめ細かく関わっている点も見逃せない。

③見守り活動の前に、まず各自が「見守られ」努力を

■見守られ上手さんがいた！

このマップをよく見ていただきたい。右下で井戸端会議（点線で囲っている）をひらいている一人暮らしの高齢者たちが、「外へ出て声掛け」「お互いに窓を開けて声掛け」「戸を開けている」とある。井戸端会議には入っていないが、中央の世話焼きのNさん（緑色）とつながっている90歳女性も、「昼間いつも戸を開けている」とある。

つまり、当事者が自分から見守られる努力をしているのだ。見守りというのが、いわゆる「見守り活動」のメインの営みと思うが、じつはそうではな



い。見守り活動の前に、まず当事者自身の「見守られ」活動があったのだ。

■見守られ上手さんがやっていること

以下は、高知県中央西福祉保健所が孤独死の事例と未然に防げた事例をもとにまとめたものと、愛知県安城市城南町内会で一人暮らし高齢者に集まっていたいただき、見守られ上手の知恵を出し合った成果をもとに、本研究所でまとめたものの一部である。

- ① サロンや役所等あちこちに顔を出して自分をアピールしよう。
- ② 出会った人に、こちらから積極的に声をかけよう。
- ③ 決まった場所で買い物をしよう。
- ④ 同じ道を歩いて異変が分かりやすいようにしよう。
- ⑤ わが家に入る機会のある人をたくさんつくろう。
- ⑥ 自宅で井戸端会議を開こう。
- ⑦ 普段と違う行動をとる時は周囲の人に伝えておこう。
- ⑧ 日頃の生活リズムを知ってもらおう（通院の日、夜は何時に寝るかなど）。
- ⑨ 体調の悪い時は早めに受診し、ご近所にも伝えよう。
- ⑩ 緊急時の連絡先は、人に分かるようにしておこう。

2.当事者はご近所圏でご近所流の福祉をつくる

(1)「ご近所」の特徴とは？

①「顔が見える」唯一の圏域

いわゆる「顔が見える」範囲が50世帯なのだ。古代の日本で国郡里という圏域が設定されていたが、この中の「里」も50世帯だった。日本の社会は50世帯を基本単位としてできているのだ。

②「助け合い」ができる唯一の圏域

「顔が見える」から助け合いができる。他の層では広すぎて助け合いは無理だ。

③当事者はここでニーズを発信中

当事者（要援護者・要介護者）はご近所において、そこでニーズを発信している。第1層や2層にいても、当事者の声は聞こえない。ご近所まで来れば聞こえる。

④当事者は第3層までには行けない

当事者は要援護のため第4層が生活圏域になっていて、ここから出るのは大変だ。老人クラブやサロンなどはみんな第3層でやっているが、当事者は多くが行けていない。

⑤ここに世話焼きさんがいる

地域では世話焼きさんが要援護者のお世話をしているが、第3層は広すぎて世話焼きさんも活動できない。対象者がよく見えるご近所で活躍している。地域福祉の当事者と人材の両方がご近所にいるのだ。

⑥「ご近所流」で助け合い

この4層だけは、ご近所さんが独特の流儀で助け合いをしている。

(2)ご近所の流儀とは？

4つの層の中で、ご近所だけは、いろいろな意味で異なっている。他の3つの層は関係者の流儀で福祉が営まれているが、ご近所だけは住民の流儀で助け合いが行われている。これを尊重しないと、ご近所さんのやる気を失わせてしまう。

① 一対一の助け合い。対象をまとめない

活動やサービスというと、対象者を要介護度や障害の種類などで分けて、まとめて提供することになるが、ご近所では厳禁。あくまで一対一の関係で助け合いをする。

② 相性の合う者同士で

相性が合わないと、日常的な助け合いはできない。誰でもいいというわけにはいかない。相性が大切ということは、人間関係が特定目的の部分的な関係ではなく、全人的な関係だからだ。

③ 双方向。一方的サービスは厳禁

住民は一方的なやり取りを嫌う。必ずお返しをしないと困るのだ。

④天性主義。世話焼きさんが活躍

そこで世話焼きさんの出番になる。住民は肩書とか研修を受けたから福祉活動を担えるとは思っていない。ご近所では、困っている人を助ける天性の資質（実力）のある人が活躍している。

⑤当事者主導。本人の側から考える

当事者が支援者を選び、してほしいことをお願いするというあり方が、ご近所ではよく見られる。当事者の自尊心を傷つけない支援のあり方を求めた結果、このような方法になったのだろう。

⑥水面下の活動。「見えない活動」

これも同じ発想だが、助けられた人の自尊心を守るために、担い手はできる限り、相手がいかにも「助けてもらった」と感じないように配慮する。また、周りの人の目につかないように水面下で活動する。

⑦私的・個人的な関係

民生委員の訪問を拒否する人は、受け入れることを社会的な義務とは思っていないからだ。ここは私の生活の場であり、私的な営みならば、訪問者は私が選ぶ権利があるということだ。

(3)ご近所の利点をどう生かす？

①ご近所とはおよそ50世帯の範囲。ここはお互いの顔が見える限界圏域だ。顔が見えるからお互いの素性がわかるし、だから当事者もこの中の誰なら助けてもらえそうかといったことがわかる。また、同じ一人暮らしなど、当事者が助けられる相手、助け合える相手もわかる。

②世話焼きさんも、ここなら相手のことがよくわかるから、困り事も見える。だから主としてこのご近所で活躍している。世話焼きさんと当事者が、お互いに相手を探しているから、出会える可能性は高い。

③顔が見えるし、お互いの行為も分かり合えるし、井戸端会議などで情報交換もしている。だから誰が庭木の剪定技術を持っている、今は誰と誰がその人に依頼しているといった情報も流通しているのかもしれない。

④そうすると、例えばデイサービスには行きたくないという人も、ではデイの代わりになるものは何か、調べればご近所内のどんな場がデイの代わりになるのかも、見えてくるかもしれない。

⑤顔が見えるという利点を生かして、福祉に関わる関連情報だけでなく、例えばデイの代わりに畑仕事をしている人などが見えてくる。それなら私も畑をやりたい、というように、デイの代わりになるお楽しみの資源をいろいろ発見できるわけだ。

⑥これが例えば100世帯、200世帯となると、とたんに見えなくなる。50世帯と100世帯の差は、想像される以上に大きいのだ。

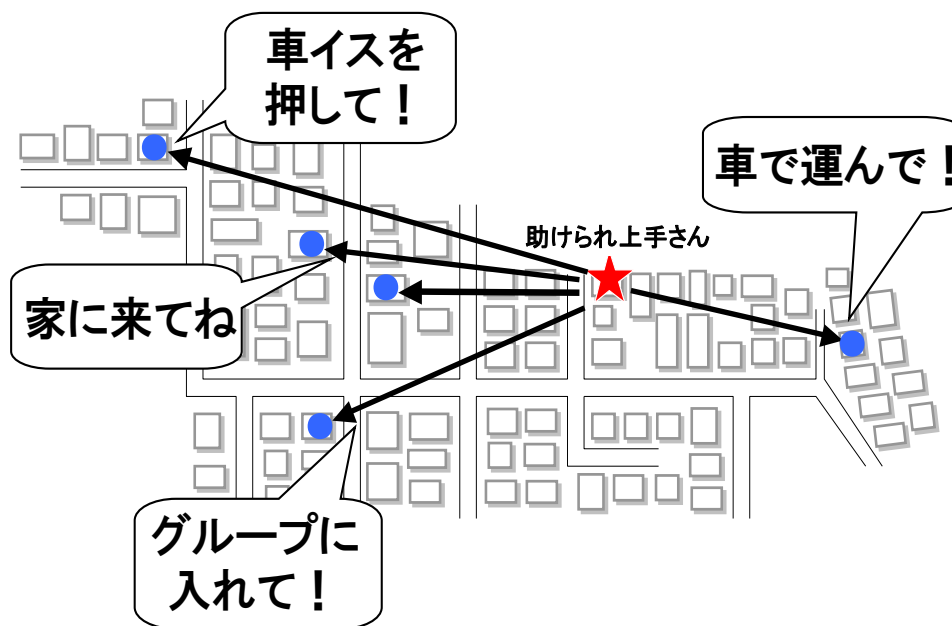
3.当事者の「助けられ」行為も福祉活動と認定

「助けて！」と言うのも福祉活動。福祉は担い手と受け手の共同作業という考え方だ。

(1)5人の隣人に「あれしてこれして」と言うのも福祉活動だ

次のマップを見ていただきたい。車椅子の夫を介護中の主婦が、ご近所さんにいろいろお願いしている。「夫を病院に運んで」「私をあなたのグループに入れて」「うちにお茶飲みに来て」「夫の車いすを押して」。

彼女に頼まれた5人に感想を聞いたら、異口同音に「やりやすい!」と言っていた。何かしてあげたい気持ちはあっても、頼まれなければ動きにくいし、何をしてあげたらいいのかも分からない。しかし当事者の側から、1人ひとりに合った活動を提案してくれるのだから、こんなにやりやすい方法はない、というわけだ。



(2)福祉は担い手と受け手の共同作業

もしこの女性が何も言わず、周りの5人に困り事を発信することもなかったら、どうなっていたか。夫婦がどんな問題を抱えているのか誰にも分らず、5人が動くことも、ご近所で助け合いが始まることもなく、夫婦の困り事は解決されないままだったろう。今の福祉の難しさは、こういう点にあるのだ。

この事例は一見すると、担い手の5人が活動をしたという構図だが、よく見れば、受け手である女性が果たしている役割がいかに大きいか分かる。福祉は担い手と受け手の共同作業だということだ。自分の困り事を発信することの素晴らしさ—まさに「活動」に値するのだ。

(4) 依頼者というよりも「推進者」だった

「助けられるのも立派な福祉活動だ」というだけではない。これは「福祉の推進」という行為でもあった。地域福祉の推進、というように使うその「推進」である。要援護でもできる活動は、実際に体を動かすことよりも、「推進」の方が適している。そうなる
と、要援護者ほど推進する側に位置すればいいとなる。「推進」も使いようで、大きな発想として役に立つわけだ。

4. 助け手確保のため「攻めのおつき合い」へ

(1) この際、日本のおつき合いのあり方を変えていこう

助けられ上手さんと言うべき人がいて、要援護でも自分の困り事を解決したり、自分の身の安全を図るために、支援を求めて積極的に周囲の人に働きかけていく「攻めのおつき合い」をしているが、こういうやり方は、日本の今の社会では常識的ではない。助ける側にしても、頼まれてもいないのに人を助けようとすれば「お節介」と言われそうで、手を出せない。

そのために日本ではいつまでたっても助け合いが進まない。この消極的なおつき合いの風土を変えていくしかない。その先鞭を切るのが当事者の役割なのだ。

(2)あなたのおつきあいの流儀は？

■まずは以下の問いに答えてほしい。10項目について、「自分もそう思う」なら○印、そうは思わないなら×印をつける。

- | | |
|---------------------------------------------------|--------------------------|
| ①自分や自分の家族の問題は隠しておきたい | <input type="checkbox"/> |
| ②自分のことがご近所で噂されるのはイヤ | <input type="checkbox"/> |
| ③人に助けを求めるのは苦手だ | <input type="checkbox"/> |
| ④人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない | <input type="checkbox"/> |
| ⑤人のことはなるべく詮索 <small>せんさく</small> しないようにしている | <input type="checkbox"/> |
| ⑥誰かが認知症だと気づいても、誰にも言わないようにしている | <input type="checkbox"/> |
| ⑦困っている人にはお節介と言われたい程度に関わる | <input type="checkbox"/> |
| ⑧引きこもるのにも事情があるから、無理こじあけるべきでない | <input type="checkbox"/> |
| ⑨お互いのプライバシーは十分に尊重し合うべきだと思う | <input type="checkbox"/> |
| ⑩隣人とはあまり深入りせず、ほどほどのおつきあいを心がけている | <input type="checkbox"/> |

■多くの人は、7つから9つほどに○が付く。それもそのはずで、これらは日本人のおつき合いの常識なのだ。○が多い人は、日本人としては常識人と言える。○が少ない人は非常識な人ということになる。

■ただし、常識人、つまり○印が多い人は、「助け合いはしたくない」と言っているのと同じことになる。なぜそうなるのかを、これから簡単に解説していくが、一言でいえば、私たちのおつき合いは「双方に困り事が生じない」という前提で成り立っているのだ。たしかに何事も起こらなければ、表面的なおつき合いだけで問題はないが、ひとたび困り事が生じたらアウトである。

- ①自分や自分の家族の問題は隠しておきたい→それでは困り事が周りに気づかれない。
- ②自分のことがご近所で噂されるのはイヤ→それでは困り事の情報周りに伝わらない。
- ③人に助けを求めるのは苦手だ→「頼まれたら助ける」のが日本人。これでは手が出せない。
- ④人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない→迷惑をかけたくないとさえ「助けて！」とは言えなくなる。
- ⑤人のことはなるべく詮索しないようにしている→詮索するほどの積極性がないと、人々の困り事は見えない。
- ⑥誰かが認知症と気付いても、だれにも言わないようにしている→それでは困り事の情報周りに伝わらない。
- ⑦困っている人には、お節介と言われない程度に関わる→そんなに消極的な姿勢では、人は助けられない。
- ⑧引きこもるのにも事情があるから無理にこじあけるべきではない→だから、孤立死が生まれるのだ。
- ⑨お互いのプライバシーは十分に尊重し合うべきだと思う→つまり「あなたのことは放っておきます（助けない）」
- ⑩隣人とは深入りせず、ほどほどのおつき合いを心がける→困り事は言い合わない、つまり助け合いをしないご近所関係

(3)これが「攻めのおつき合い」

ここまで述べてきた日本人のおつき合いの流儀を全部引っ繰り返すと、それが「攻めのおつき合い」になる。

- ①夫が認知症になったなど我が家の問題をオープンにしよう
- ②わが家の問題を敢えて噂話にのせてもらおう
- ③困ったら「助けて！」と叫ぼう
- ④困ったら、相手に迷惑をかけてでも助けを求めよう
- ⑤困っている人がいたら、詮索するぐらいの気に関心を持とう
- ⑥困っている人を見つけたら周りに伝えよう。口が堅いのもよし悪しだ
- ⑦困っている人には、お節介と言われても関わるようにしよう
- ⑧引きこもる人を助けるために、思い切ってこじあげよう
- ⑨相手のプライバシーを尊重しては助けることはできない
- ⑩助け合うには、互いに深入りするぐらいの濃密な関係を

5. 自助型の新しい助け合いを創り出そう

(1) 求める情報はあげるが、手助けはしない

この件の具体例は、本書の8ページにある。庭木の剪定に苦勞している一人暮らしの高齢女性たちが、たまたま企業退職後に庭木の剪定技術をマスターした人を見つけた。その人をお願いしたら、その後、「私も」「私も」と彼に頼む人が増えて、最終的には11名の人が彼のおかげで助かったという話である。

(2) 当事者が主体者として相手と個別に交渉

今までの福祉では、何か資源があった時に、それを管理し、対象者を探し、それを確保できる方法を教えて、申し込みを受け、それから配分するというやり方を取っていた。しかし、なぜかそのやり方ではそんなに広がっていない。

一方で、庭木の剪定のマップを見ていただきたい。わずか数十軒の中の10名の一人暮らしの高齢者が直接この活動を依頼している。じつに効率がいいではないか。誰かに世話をしてもらおうと、どこか他人事になるが、この場合は個々の人が自分の困り事を解決するために、ご近所内で資源を探し、見つけたら自分で担い手と交渉する。そのため、謝礼の仕方も各自の事情によって異なっている。本人の経済状況、両者の関係、お願いする仕事の内容等に応じたものになるからだ。

つまり、マップを見ると、一見、彼が11人をまとめて面倒を見たように見えるが、じつはそうではない。1人ひとりの当事者が個別に彼と交渉して成立したものである。

当事者同士の助け合い（資源の情報交換）が行われるとともに、当事者1人ひとりの主体性が尊重されており、交渉の主導権は本人が握っている。

(3)様々な人材がいて、それらを全て活用できるなら、これぞ福祉のご近所

感心させられるのは、当事者の情報力の豊かさである。私たちは、自分のご近所で庭木の剪定をしてくれる人は誰で、それを誰と誰が活用しているのか、また各自、何をお願いして、いくら払っているのかといったことは、よく分からない。ところが当事者たちは知っている。変な話だが、これが当事者であることの特権なのだ。彼らの間でそういう情報が複雑に行き交っていて、その複雑さ、豊かさが深まれば深まるほど、お互いが助かる。

庭木の剪定に限らず、ご近所毎に、当事者にとって有難い人材が多種類いて、それらのすべてを当事者が活用できるとなれば、これこそが福祉のご近所ということになるのだ。

(4)それぞれが自分の行動原理で動くが、併せてみると助け合いだった！

それぞれがその人の考えで個別に行動しているが、それを全体として見れば助け合いになっている—という関係もある。

①一人暮らしで認知症の人がサロンを開き、参加者は彼女を見守る

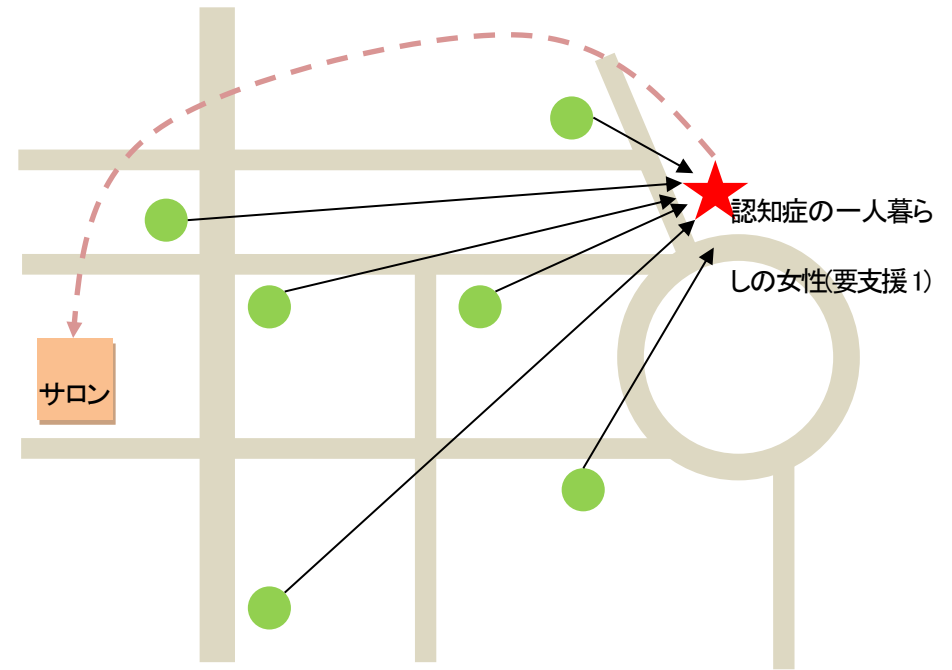
住民の福祉活動というとすぐに思い浮かぶのが「見守り」である。しかし住民流の福祉の感覚では、ただ純粹に見守りという活動だけをするというのは、おかしい感じがする。見守りというのは、日常生活の中でその人に関わりながら自然に行うものであり、また、要援護者の見守りをしていけば、必ず気になることが出てくる。だからそれに関わる、という行為が生まれてくるはずなのだ。

次のマップは、岡山県で作ったものである。ここはいわゆる「ご近所」ではない。200世帯の自治区である。本当はこんなに大きな地区ではマップは作らないのだが、自治会長が是非にというので、例外としてやってみた。自治会として何をしているのかと聞くと、ふれあいサロンを開いていると言う。

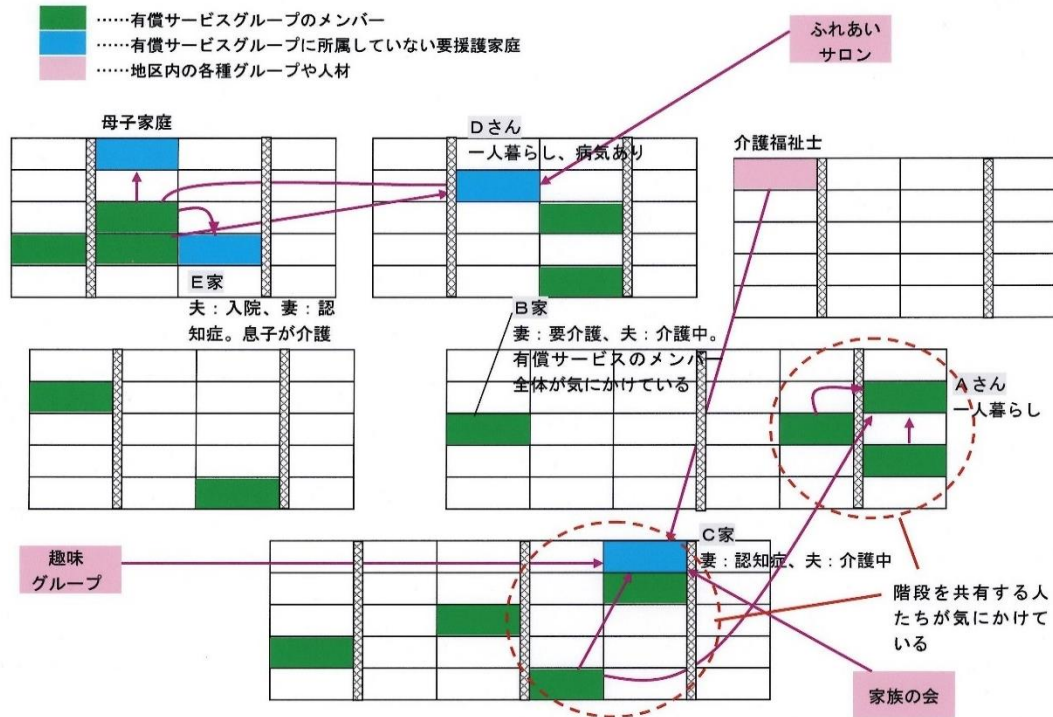
参加者は25名。ほぼ全員が班長だというから、仕方なく参加した人ばかり。そこで、サロンから遠い右の方で人が集まっている所はないかと聞いたら、ロータリーの所で10名ぐらいが集まっているという。200世帯の左端に公会堂があるのでは、右の人たちは参加できない。住民の距離感覚はこんなものなのだ。

ロータリーで集まった人たちはその後どうしているかと聞くと、2軒で二次会をしているという。その1つが、マップにあるよ

うに一人暮らしの認知症の女性宅だった。参加者の1人がマップづくりの場にいたので、そこに参加する理由を聞いたら、「彼女の見守りがてら」と答えた。参加者はサロンのメンバーの顔をしながら、いろいろ面倒を見ているのだろう。住民はなかなか味なことをする。



②妻を介護中の夫が有償グループに。代わりにグループは妻の見守り



左のマップは団地の一角。この地域に有償の福祉サービスグループができていて、メンバーが自宅に帰ってからも助け合っていた。例えば一人暮らしの仲間（Aさん）を、同じ棟の仲間が見守っている。Bさんも要介護の妻を介護中だが、団地内の仲間全体で気にかけている。夫が入院、妻が認知症、それを息子が介護中という家庭（E家）も棟内の仲間が支えていた。これらはすべて無償の活動だ。

他にもC家には家族の会も来ている。他棟の介護福祉士も。Cさん宅には趣味グループの仲間も来ていた。Dさんの家には、サロンのメンバーが来ていた。

Bさんの夫は、このグループの活動に参加していた。そのつながりで、仲間が彼の妻の面倒も見ている

のだなとわかった。それぞれが勝手に行動しているようでいて、結果としては助け合いになっている。

(5)要介護者宅に要介護者を受け入れることで共に利益

超高齢の一人暮らしで重度の障害がある女性が自立生活をしている。これも彼女を献身的に支援している民生委員のおかげなのだが、彼女も自分のできることで地域に貢献している。特別養護老人ホームに夫婦で入所している人を彼女は毎月、彼女の自宅に里帰りさせていた。また認知症などの要援護者の居場所としても自宅を開放していた。

これを彼女ができるのは、①彼女が一人暮らしで、②家も要介護の人が過ごし易いようになっているし、③1人だから話し相手を求めているし、④自分も要介護だから相手の気持ちもわかるし、⑤場合によっては彼女も介助してもらえるなど、意外にいい面がいろいろあるからなのだ。普通の家庭では受け入れが難しい活動が、要介護の彼女だからできているとも言えるのだ。

(6)恩返し一時間差の助け合い

私たちは福祉というと、助ける側か、助けられる側かのどちらかだと考えがちだが、それは誤りだ。助けられ上手さんは、意外にも同時に助け上手さんでもある。少なくとも、上手かどうかに関わらず、そういう人は、必死に人助けに励んでいる。そうすれば自然に助け手がやって来る。そういう関係になっているらしい。

①自分のことはだれかが面倒見てくれる

興味深いのは、本当の助けられ上手さんは、人に助けられるよりも、とにかく人助けに励んでいることである。それをやっている間に、誰かが自分を助けてくれる。そういう関係になっているのだ。

だから「要援護になっても人に尽くす」という言い方は正しくない。要援護になったら余計に、人は人助けをしたがると考えた方が正しいのだ。

②あの人は人に尽くしてきたから、これからは私たちがあの人を助ける

中型、大型の世話焼きさんは、ご近所によっては存在しない場合もあるが、小型の世話焼きさんなら、どのご近所にも間違いなくいて、自分の周りの要援護者に関わっている。

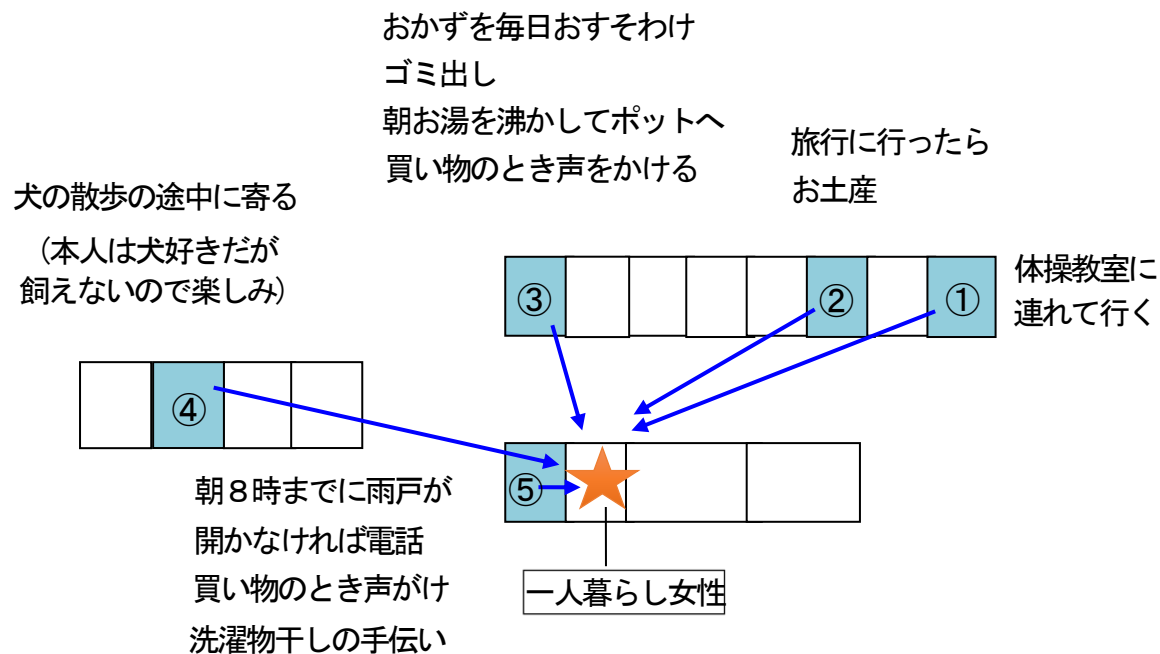
次のマップは、ケアマネジャー等の専門研修の一環として、ご近所の要援護者等のマップ作りをしてもらったものの1つである。足元で見つけた一人暮らしの高齢女性に誰が関わっているかを調べたら、これだけの人材が見つかったというものだ。

事情を聞いてみると、彼女の亡き夫が生前、この地区の人たちに尽くした。それが忘れられず、恩返しとして、ご近所さんのはこされた妻の面倒を見ていたのである。

こういう事例が、マップ作りをするとよく出てくる。日本人が人に尽くす大きな動機の1つに「恩返し」があるのだ。

日本人は、ご近所の人からおすそわけをもらっただけでも、お返しをするまで何となく落ち着かない。負い目を抱えているのが苦手で、早く返したいと思う。これが活動の動機付けとして、かなり強力であるらしいのだ。だから、元気なうちから、できるだ

け人を助けておく。要援護になっても、人のためにできることをする。それが、自分が困った時に助けてもらうための大きな秘訣になるのだ。



6.受け手側としてやるべきことを実行

福祉とは担い手と受け手の共同作業であり、担い手だけで努力するのではなく、受け手側にもやるべきことがたくさんある。今の福祉では、受け手側はサービスの対象者という立場で、特に何の役割も担っていないに等しい状況である。そのことを確認したうえで、1人ひとりで、または組織として何を為すべきかを整理し、できるところから実践していかねば、現状では担い手とのバランスがあまりにも崩れているのだ。

(1)助けられる側の標準的な活動

①第1段階＜最も初歩的な行為＞

- ①自分の問題をオープンにする。
- ②助け手を確保する。
- ③助けを求める。SOSを発信する。
- ④支援のお礼をする。身内が代わりにする場合もある。
- ⑤支援のお返しをする。すぐの場合と、あとでする場合も。
- ⑥当事者同士で助け合う。

「助け手を確保する」事例・介護を手伝ってくれる人を探す

元民生委員の辰和子さん（写真・左端）は、末期癌の夫を自宅で看取るため、ご近所の友だち2人（写真・中央と右端）に助けを求めた。普通にご近所の人には我が家の問題を知られたくないと思いがちだが、近いからこそ夜中の緊急事態にも駆けつけてもらえたとし、元々「夫婦で友だちづきあい」を心掛けてきたので、2人と夫も気心が知れており、オムツ替えまで手伝ってもらえたという。



「支援のお礼をする」事例・一人暮らしの母の隣人にお礼参り

H子さんは、隣町に一人暮らしをしている母を、妹と交代で訪問しているが、そのとき必ず、ご近所まわりをすることになっている。「いつも母のことを見守っていただき、ありがとうございます」と言ったら、隣人はこう答えた。「あなたがこうやって来てくれるので、私も気兼ねせずにお母さんの家に上がれるのよ」。子どもと母親と隣人が協力し合えば、見守りも万全。いざというときの備えも。

②第2段階

- ①担い手が活動し易いように工夫する
- ②担い手に支援の仕方を教える
- ③担い手の支援活動に自分も参加する
- ④自分の支援用の会議を開く
- ⑤自分の支援ネットをつくる
- ⑥担い手と一緒に学習する

「担い手が活動し易いように工夫する」事例・元気な時はハンカチを窓に吊るしておく

高知市内のある通りは、一人暮らしの人がたくさん住んでいる。彼らが、見守る人の便宜を図るために、あることを考えた。それぞれが、元気な時は戸を少し開けておくとか、ハンカチを窓に吊るしておく、といった工夫をし、そのことを見守る人に伝えた。だから見守る人は、その通りを歩きながら、戸の開き具合とか、ハンカチのあるなしで相手の状況を把握できるのだ。

「担い手が活動し易いように工夫する」事例・裏口から入れば、すぐに寝室があります

住民との懇談で、「災害時に助けてもらい易くする工夫」として、出てきた事例。

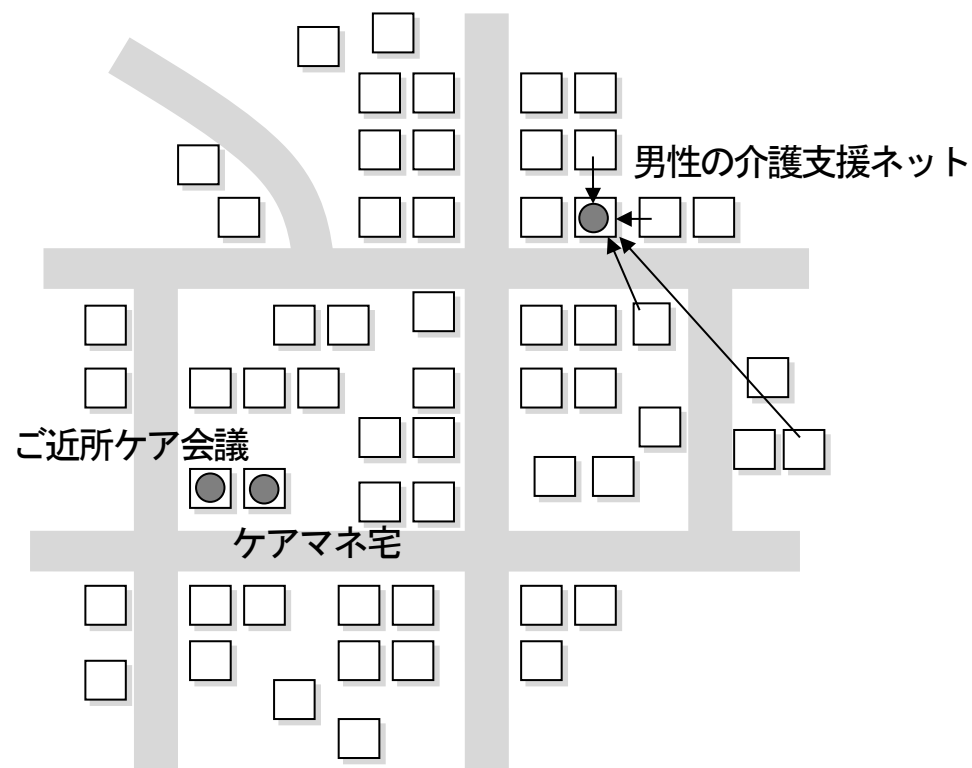
- ①寝ている場所や非常時の出入り口を、ご近所に知らせておく。
- ②要介護の夫を、何かあった時にすぐに運び出してもらえるよう、1階の出入り口に近いところに寝かせている。
- ③昼間独居の世帯から、「災害が起きた時は裏口から入ってもらえば、すぐ寝室があるから、そこから助け出してほしい」と申し出があった。

「担い手に支援の仕方を教える」事例 認知症である私の支援の仕方をパンフレットで

英国で総合診療医をしていたジェニファー・ビュートさん（67歳）は、認知症と診断された後、これから自分をどのように支援してほしいのかを具体的にまとめた「認知症である私について」というパンフレットを作り、家族や友人に配った。

「自分の支援用の会議を開く」事例 認知症の母のケア会議をご近所さんと

認知症の家族を介護する主婦が、ご近所のケアマネジャーの働きかけで、自分たちのためのケア会議を開いていた。参加するメンバーは、その主婦自身が選んだ人たち。次頁のマップの「ご近所ケア会議」が当事者宅で、その隣がケアマネ宅。



「担い手と一緒に学習する」事例・見守る側と見守られる側が集まって見守りの研究

見守りセミナーにボランティアと一緒に参加して、見守られる側からのアイデアや要望を出すなど。上の写真では、愛知県安城市の城南町内会で、一人暮らし高齢者と関係者が一堂に会して、見守りのあり方と見守られのあり方を一体的に議論した。

第2章 当事者がつくるご近所福祉

1.足元に身を守る「安心エリア」をつくる

自分のための福祉を、その人なりに組み立てることができる人はまだあまりいないが、これができれば、助け手を上手に確保できるから有利だ。自分のための福祉を組み立てるとは、例えば自分の足元の自助エリア（最低限、身を守るための空間・10～20世帯程度）やご近所（50世帯）の助け合い起こしができるということである。無論、1人ではできないから、仲間と一緒にやることになるのだが。

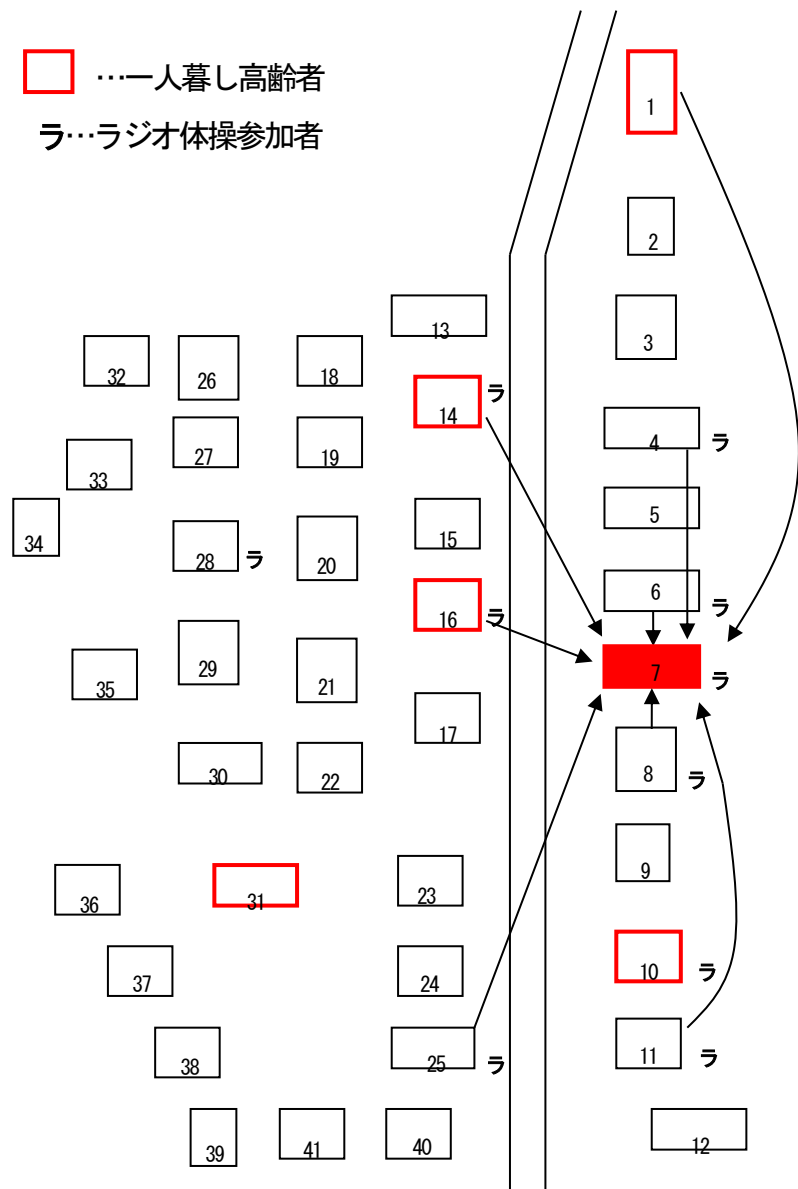
(1)自宅でお茶会開く一人暮らしの女性。参加者はさりげなく見守り

次頁のマップ。右側の道路は「あいさつ通り」と言われ、出会ったら挨拶することになっている。ここで毎日、ラジオ体操が行われている。世話焼きさんがラジオを持ち出すと、通りの住民が自宅前に出て、一斉に体操を始める。一人暮らし高齢者が数名住んでいるが、体操への参加で安否確認ができる。

メンバーに90歳の一人暮らしの女性がいる（7番の家）。彼女の家にとくさんの線が入っている。ラジオ体操の後、彼女が「ウチに来ないかい」と誘っていた。ここで毎日のお茶会が開かれ、帰りには彼女の手づくりのおかずを手渡されたりする。招待された方は、さりげなく彼女の体調を観察し、困り事があれば応じてもいる。

□ …一人暮らし高齢者

ラ…ラジオ体操参加者

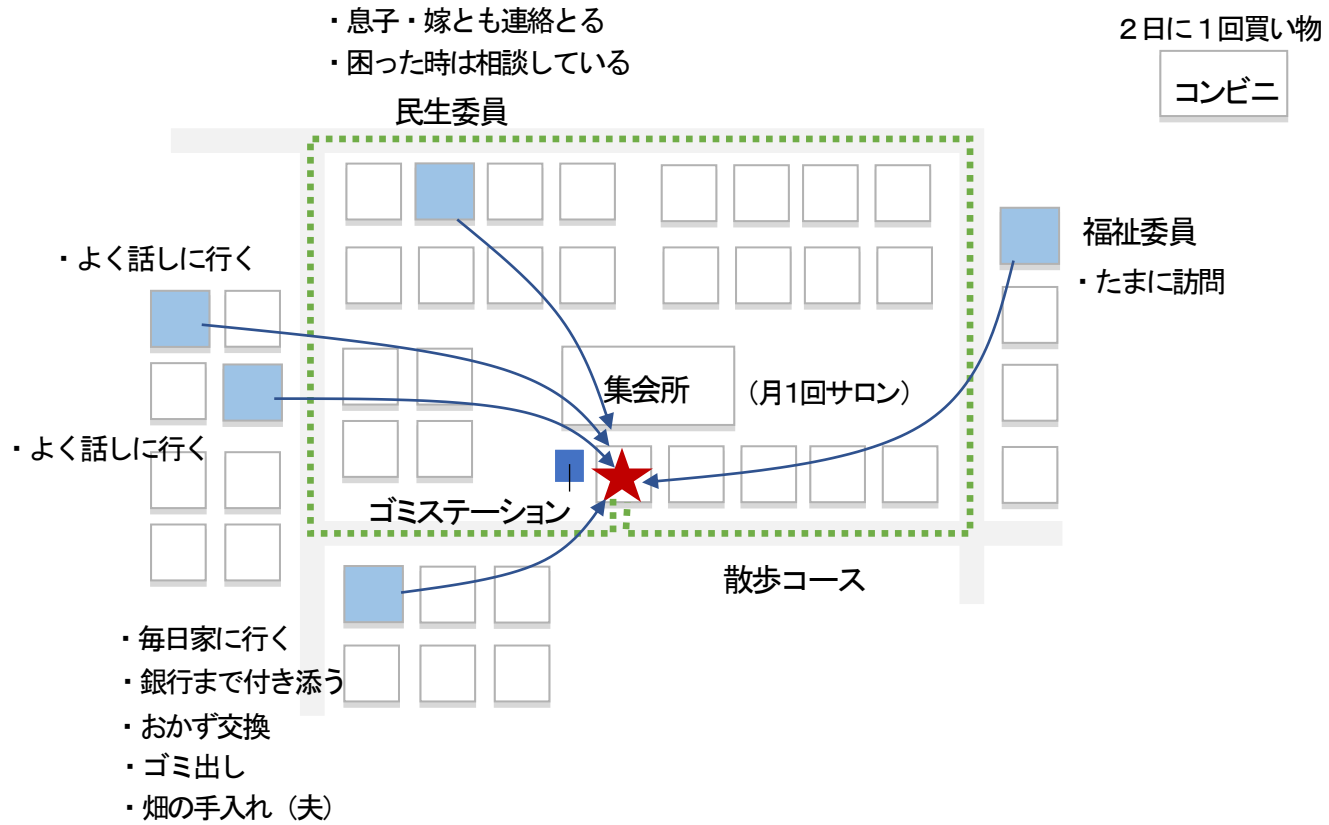


(2) 「安心エリア」づくりで工夫を凝らす一人暮らし

支え合いマップ作りをしていて発見したのが「自助エリア」、またの名を「安心エリア」。どういうわけか、一人暮らしになると、それも超高齢になるほど、自宅に周りの人を寄せ集めてお茶飲みをしたりしている。それだけでなく、自分の周辺を、文字通りの「安心エリア」にすべく工夫を凝らすのだ。

次に紹介するのは、山口県和木町の地域包括支援センターのスタッフが最近、当事者（S子さん）と一緒に作ったマップ。彼女は更新申請で要介護度が下がってサービスを減らさなければならず、包括や民生委員が関わりながら、困り事の解決にご近所の友人たちの支援を得て、自立して生活できている。

マップを見ると、自宅のすぐ横にゴミステーションがある。以前はそれが嫌だったが、「今は近くで助かる」。すぐそばに集会所もあり、そこで開かれるサロンに参加している。散歩ルートには彼女を見守ってくれる人がいるし、逆に彼女が見守っている相手（男性の一人暮らしの人）もいる。その他、日常的に彼女の世話をしてくれる人も数名いる。この全体を見て、まさに「安心エリア」だと思われる。こういうエリアづくりが自助努力の基本と言えよう。



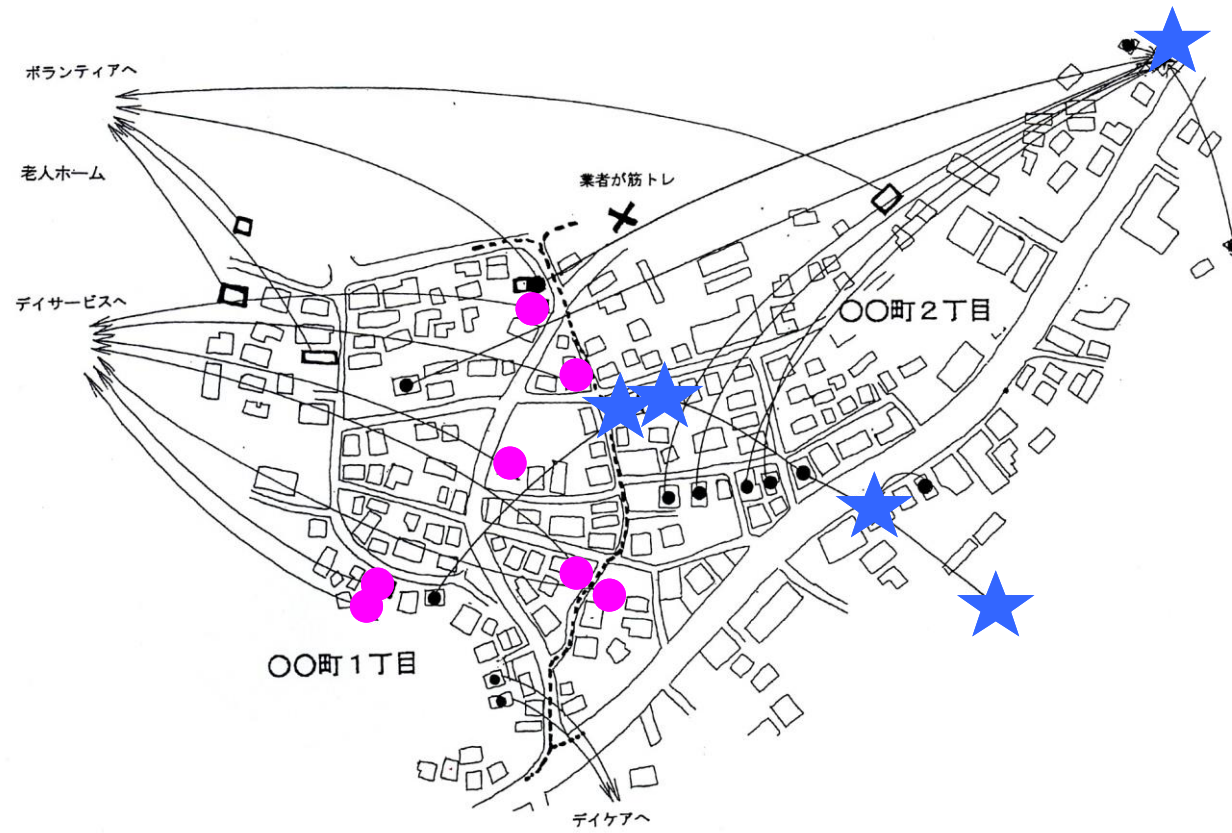
2.自分の福祉サービスは自分でつくる

自助という限り、決まったサービスをただ受けるだけではなく、自分のための福祉は自分で考える、やり方も自分流で、というのでなければ意味がない。ここでは、例えばデイサービスは自分に合わないという場合に、代わりにどんな選択肢があるのか、その事例を紹介してある。

(1)井戸端会議、じつはデイサービスだった

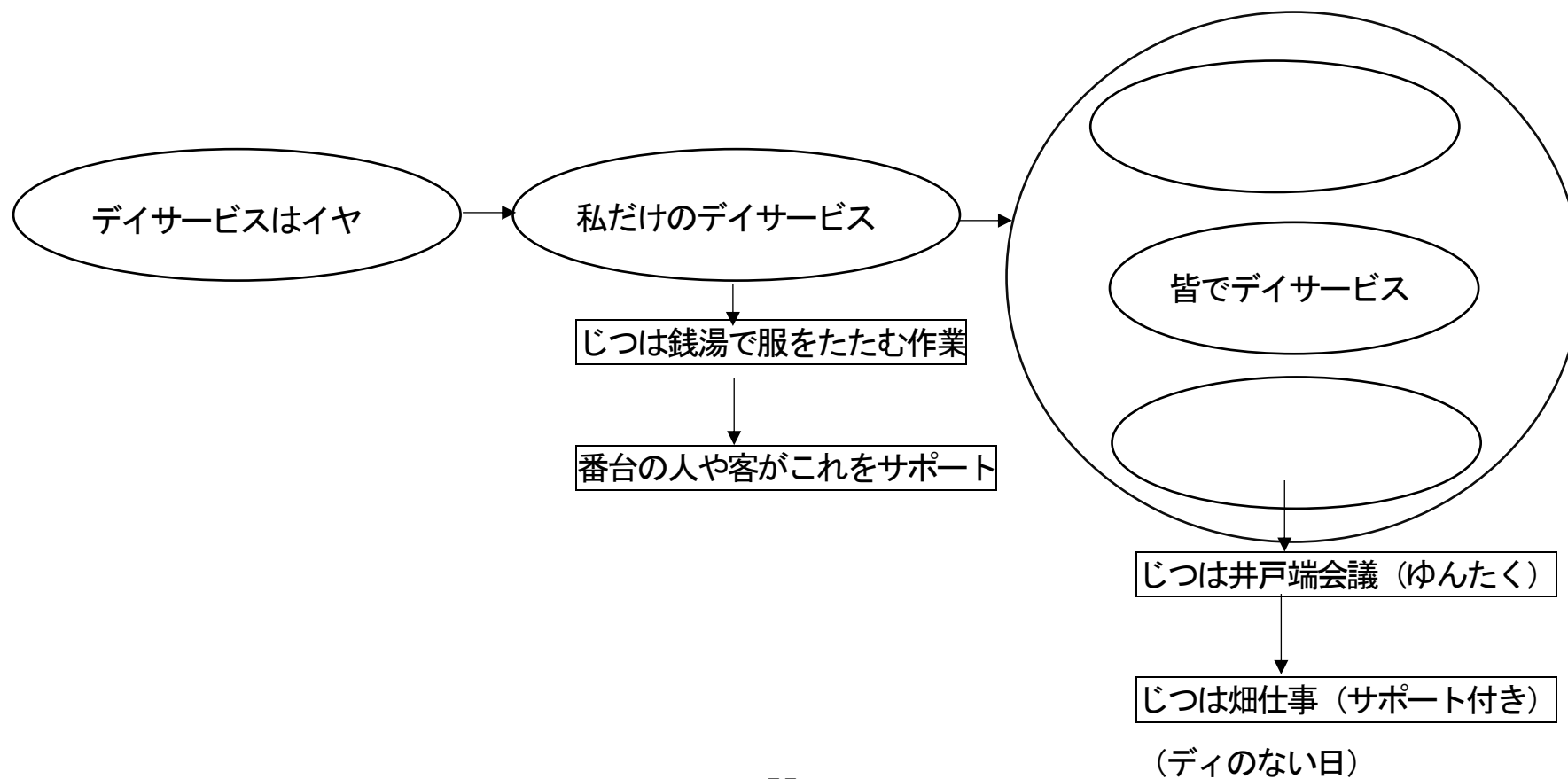
ここは沖縄。中央の道路を境に、左が1丁目、右が2丁目。不思議なことに、デイサービスを利用しているのは1丁目の人ばかりだ。では、右側の人にはデイサービスを利用しないで何をしているのか。それが「ゆんたく」だった(★印)。

沖縄では井戸端会議やミニサロンをこう呼ぶ。この「ゆんたく」が彼らの事実上のデイだと考えたらどうか。道路の縁石に腰を掛けてやるゆんたくもあれば、右端はたしか中華料理屋だった。1丁目の人たちは、これに対して、福祉施設のデイサービスを利用している。



(2)自分に心地よい行為を「デイサービス」にリメイク

サービスを自分流に解釈し、自分に心地よい活動を見つけて、それをもってサービスとしている当事者がいる。主体性をとことん主張したサービスの作り替えである。



(3)本人の意図を理解した人がこれをサポート

①デイサービスは自分に合わないので、自分に心地よい行動から、そのサービスと同じ機能を果たしているものを選び出して、それをもって自分流のデイサービスとする。

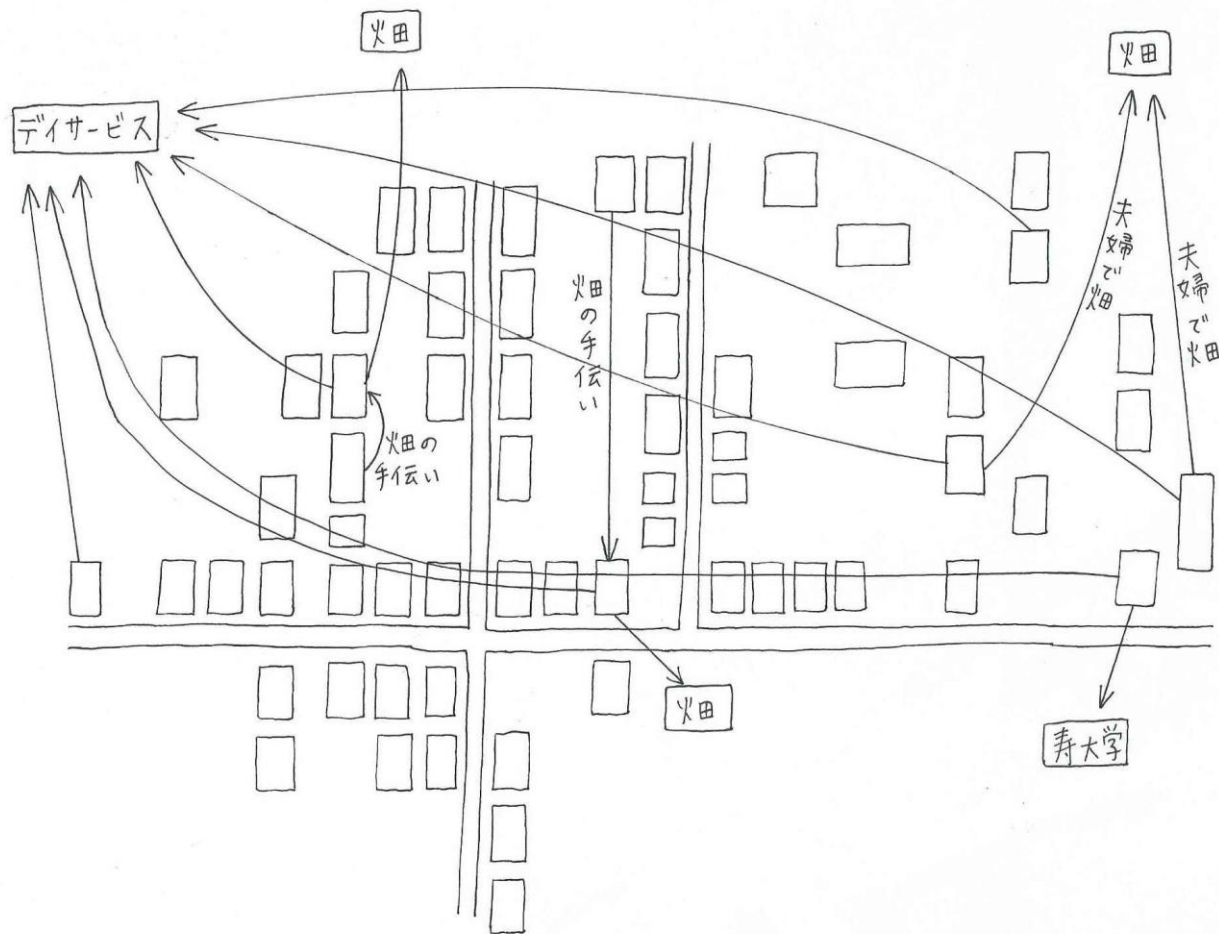
②自分たちが実践している心地よい行動の中から、そのサービスと同じ機能を果たしているものを選び出して、それをもって自分たちのためのサービスとする。

③本人の考え方や意図を理解した人が、これをサポートする。こちらの事例は、次の畑作業で出てくる。

(4)デイのない日に畑作業。これもデイだった？

マップ作りで、デイサービスを利用している人は、それ以外の日に何をしているのか住民に聞いたら、畑をやっている人が多いことに気づいた。次のマップでは、7人のうちの4人が畑をやっている。無論、組織的なものというよりは、それぞれが自分の意思で耕作しているのだが、ではまったく組織的ではないかという、それも違う。その中間形態というところだ。阿吽の呼吸という感覚である。

面白いのは、この4人の全員にサポーターが付いていて、畑仕事を手伝っていることだ。2人は身内でなく隣人だ。まるでデイサービスセンターで活躍するボランティアという感じではないか。サポートする側も、恐らくそういう意識でやっているのではないか。



(5)毎日銭湯に来て他人の服を畳む認知症の女性。これは何だ？

知人が久しぶりに銭湯に行った。服を脱ぎ、湯船に浸かっている、ふと脱衣場を振り返ったら、なんと自分の服を畳んでいる人がいる。慌てて脱衣場に戻ると、番台の人から声がかかった。「その人はぼけてしまってね、毎晩お客さんの服を畳みに来るんだよ。畳むと気が休まるみたいだね。だからみんな、畳ませてあげているんだよ。あんたもそうしなさいよ」と。

おそらく家族からはデイサービスに行くように勧められていても、本人はここへきて服を畳むのがいいということだろう。

だから彼女にとっては銭湯がデイサービスセンター、番台のおばさんが所長、ないしはスタッフ。客は、服を畳ませてあげボランティアだ。こういうサポートによって、彼女は安心を得ているのだ。

大抵の人は、サービスが気に入らなくても担い手主導のやり方にそのまま乗ってしまうものだが、これらの事例では、銭湯にしても、畑にしても、「ゆんたく」にしても、当事者のやり方は、あくまで自分主導で、しかも自分の流儀をサービスに取り入れるのがうまい。

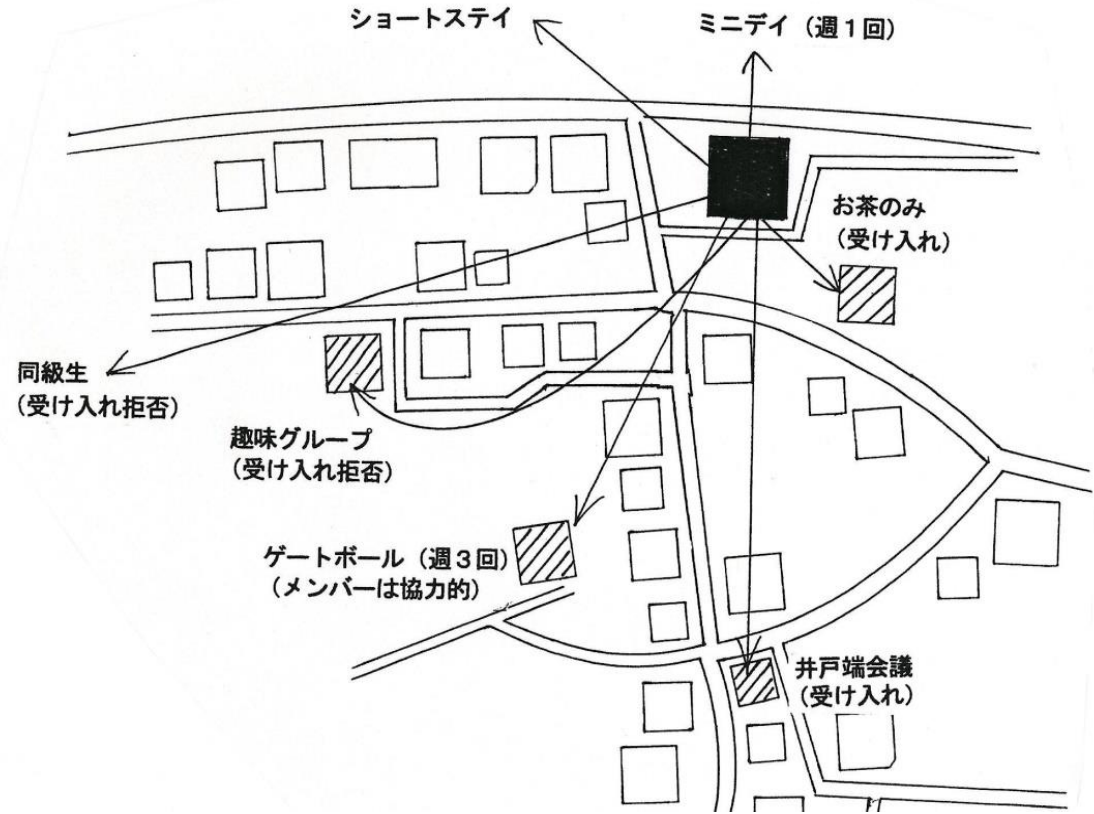
(6)私にとっての豊かな福祉サービスは私が選択する

要援護者が望んでいるのは、安全の確保や困り事の解決だけではない。次のマップでは、認知症の女性が、ご近所を歩きながら、あちこちに「私も入れてちょうだい」と押しかけていた。

これに対し、昔の同窓生は「うちに来ないで」と排除していた。趣味グループも同様。一方でゲートボールのグループは彼女を受け入れていた。サロン（井戸端会議）も、「お茶飲み」のメンバーも受け入れている。

彼女は何をしたいのか。自分が選んだ場や活動に参加し、私らしい豊かな人生を送りたいということだ。そうすると「入れてあげる」のも、それだけで立派な福祉活動とすることができる。当事者の主張や願いは、言葉よりも行動によって表されるから、彼らの何気ない行動をよく読み取る必要がある。

これらも、同じように事実上のデイサービスなのかもしれない。



(7)ご近所での助け合いの形をそのまま老人ホームに

①「集落老人ホーム」でユニットケア

老人ホームでユニットケアというやり方が広がっている。何百人をひとまとめにケアするのはどう考えても非人間的だ。

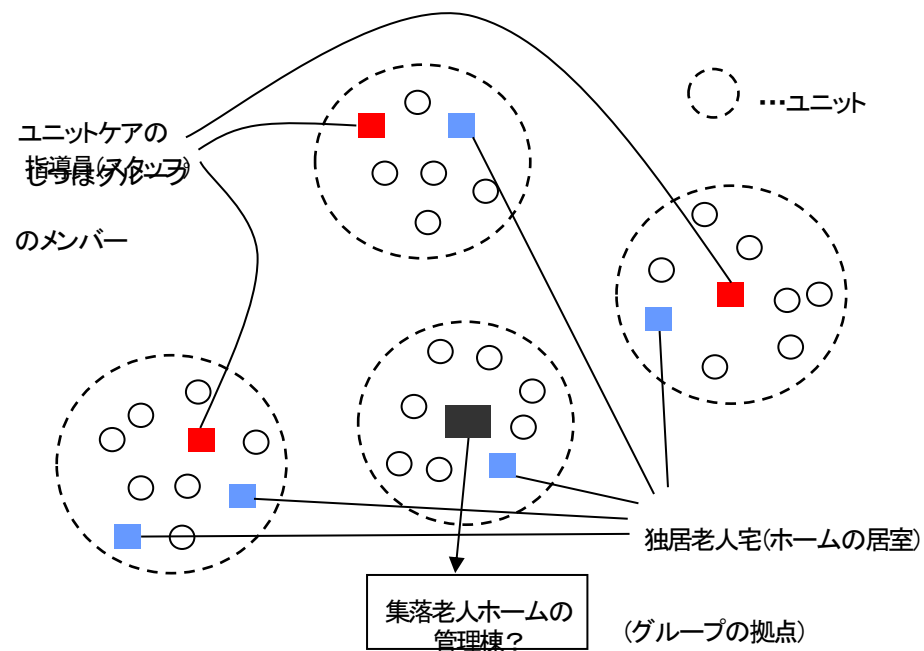
そこで数名程度にグループ分けして、それぞれが仲間としてふれあい、生活を共にする。

あるご近所では、このユニットケアと同じやり方で、要援護者の見守りやケアをしていた。しかもこちらは施設ではなく、地域そのものだ。

ご近所をグループ分けして、ボランティアたちが真ん中の集落でサロンを開いている。そこに各グループのボランティアが、一人暮らしの高齢者を連れてくる。終わったらまた連れて帰る。

普段はそれぞれのグループのボランティアがグループ内の要援護者の面倒を見る。これなら施設に入らなくても、何とか元気に地域で生きていける。

福祉機関が真ん中の集会所にお泊りができるようにしようかと検討している。要介護になっても、昼間は自宅で生きていける。夜だけはお泊りの家でケアを受けながら過ごす。



実際に施設入所がふさわしい人もいるが、まだ自宅にいる。

②要介護高齢者の家庭での住まい方をそのまま老人ホームに

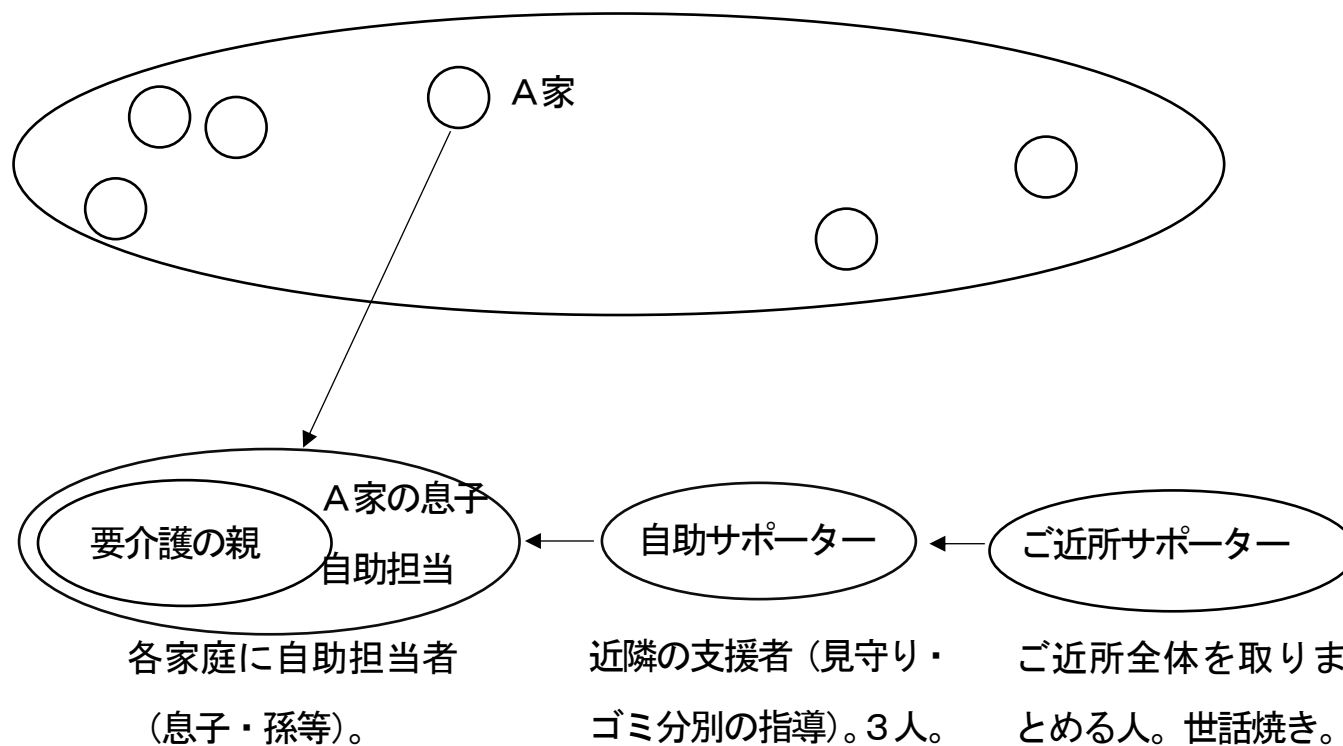
ここまでも述べてきたが、本当の福祉のあり方を探ろうとしたら、住民がやっていることを丁寧に観察して、彼らの意図していることを図式化あるいは構造化してみるといい。ここではその試みをやってみよう。

1つの集落（50世帯）に6軒の要介護者のいる家があった。大抵は息子が親の面倒を見ている。ご近所さん数名が見守っている家も。これを生かせないか。息子が各家の自助担当。近隣の数名がサポート役。その全体を世話焼きさんが取りまとめる。

この集落の実態を眺めて、彼らは一体どんな福祉をしたいと思っているのかを想像してみたら、こういう構図が出来上がった。1つ1つの家が老人ホームの居室と見ればいい。老人ホームが全部で6つある。それらが何となくつながって、つまりコテージのようになり、1つの老人ホーム群ができている。

これを素直に認めるとしたら、それぞれの「ホーム」の息子たちをホームのマネジャーとして手当を支給してもいいのではないかと考えたのだ。この息子、一般的な言い方としては、8050問題の当事者に似ている。しかし彼らは見方を変えれば、こういう老人ホーム群のマネジャーの役をやっていると見てもいいのではないか。

私たちは人の評価を周りの目からのみ見る癖がある。そうでなく、当事者本人の側からも見てあげる必要がある。一見、家でブラブラしているように見えても、自宅でそこそこの役割を果たしているとも考えられる。ハウスキーピングとか親の介護の一部も



果たしているかもしれない。ならば、それに対して正当な評価を下し、サポートをしながら、それを手当等で報いるのも1つのあり方ではないか。

図に示したように、親や自分も含めた、わが家の自助活動のマネジメントという役割もありうるのだ。

3.庭木の剪定技術等の人材情報のネットをつくる

助けられ上手さんと言われるには、いろいろな資質が求められるが、その1つは地域の資源情報に詳しいこと、それをうまく活用できることである。例えば石川県や福井県あたりでは、庭が広いし、家も大きい。こうなると不便なのが、庭の草取りや庭木の剪定で、それができる人を見つけられなければ困ってしまう。

(1) 1人が見つけた庭木の剪定の人材を10人で活用

8ページのマップが、その事例だ。企業を退職した男性が、生きがいに庭木の剪定技術を習得した。すると近くの一人暮らしの高齢女性が「うちの庭をお願い」と頼みに来た。それを知った他の高齢者が「うちも…」と来て、とうとう11軒の庭木の剪定を請け負うことになった。50数軒の中の11世帯である。当事者の方が相手を特定して、皆でうまく活用している。このような特殊技術に限らず、このやり方を、他の困り事にも適用すればいい。

興味深いのは、ここまでやっているのなら、もっと組織化したり、ネットワークを作るとかすればいいのではないかと思うところだが、住民はそれはしないのだ。お礼の仕方は1人ひとり全部違う。やはりそれは、一律にはできない。依頼する人とされる人の人間関係や、頼む側の経済状態などで変わってくるからだ。あくまで個別対応であり、だから一定以上は「仕組み」にしないのだ。

4.当事者側から自助型の地域福祉活動づくり

(1)「車のない一人暮らしの買い物」対策で解決策の定式を見つけた

車のない高齢者の買い物問題には、すでいくつかの選択肢があって、それぞれが周りを見ながら、自分に合った方法は何かを考え、自分に合った解決法を実行できる。当事者1人ひとりの自己努力をマップで調べたところ、主な選択肢が見えてきたのだ。

次のマップは6ページで紹介したものだが、ここで詳しく見てみよう。ある地区で、車のない一人暮らし高齢者はどうやって買い物をしているのかを調べたものである。彼らの助け合いの実態を整理してみたら、以下のことをやっていた。

- ①本人が自力で電車に乗って買いに行っている。
- ②息子や娘が来る時に、ついでに買ってきてもらう。
- ③一人暮らし同士で、ついでの際に買ってきてもらう。あるいは注文したら取り寄せてくれる店を開発。
- ④ご近所さんと買い物で協力をし合う。
- ⑤移動販売を皆で利用。

(2)自力解決、身内で解決、当事者同士、ご近所と助け合う

他のご近所でも、まずまわりの当事者仲間たちがどういう方法を取っているかを調べ、リストアップする。その中から自分にできそうなものをいくつか選択し、それを実行すればいい。

といっても主な方法は共通している。一般的に言えば、①自力解決、②身内で解決、③当事者同士で助け合う、④ご近所さんたちと助け合う、⑤その他の資源の活用だ。

(3)一般の地域活動と違うのは、「自力・身内」解決が加わっていること

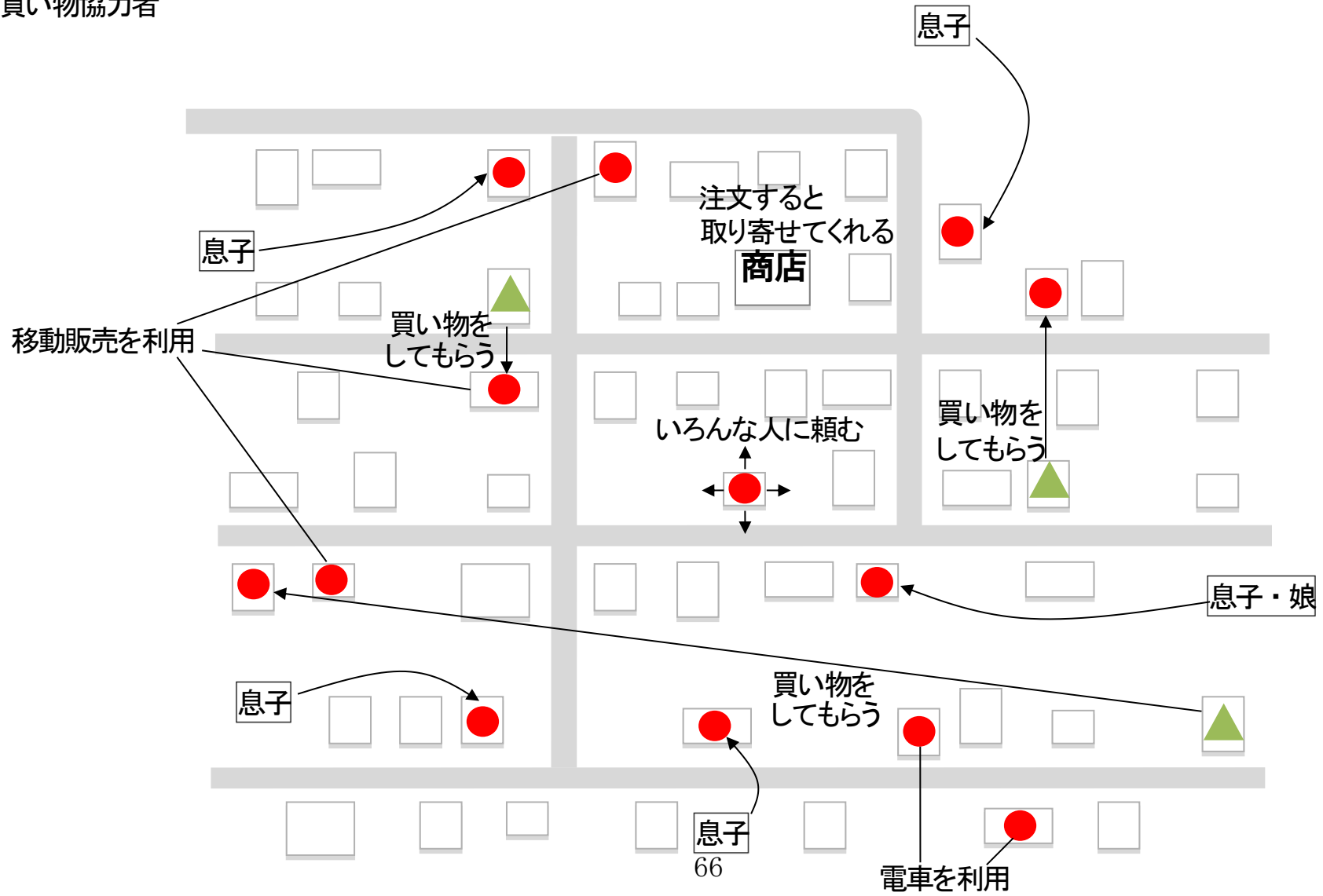
この①～⑤の5つを見てどう思われるか。じつはこれらは、一般の住民たちのやっている福祉活動とほぼ同じである。違うのは、当事者の場合はいわゆる「自助」の部分が入っていることだけだ。①は自力で。②は身内で。

しかしよく考えてみれば、一般住民も地域福祉活動の出発点は自助の行動なのではないか。困ったことを家族で解決したり、自分で対処したり。つまり地域福祉活動のやり方はすべての人に共通していた。そして自助から出発することを今から意識し、取り組んでいけば、要援護になった時に助かるはずだ。

これからは一般住民も、まず自分の問題に目を向け、それを自力や身内で解決することから始める。その次に同じ当事者仲間と助け合い、次いでご近所の人たちと助け合い、そして広く地域の支援を求める、という段取りで進んでいけばいいのだ。

● 交通(車)に不便をしている一人暮らし高齢者

▲ 買い物協力者



(4)当事者の方が盛んに（自助型で）地域福祉活動をしていた！

前述の通り、このマップを社会福祉協議会や地域包括支援センターなどのワーカーに見せると、同じような反応が返ってくる。まずマップをじっと見て、驚いた顔をする、そして「これ、面白いですね」と言うのだ。バシャバシャとスマホのカメラに収める人もいる。何が面白いのか。私たちは当事者の自助活動というものは大して行われていないと思っているからだ。しかし現実はかくのごとくである。試しにマップ作りを当事者と一緒に行い、彼らの行動をマップにのせてみるといい。

こう考えたらどうか。福祉というのは、まず自助である。地域では、各自が自身の問題解決に日々動いている。そこでは、世話焼きさんをのぞけば、他者がわざわざ当事者のために何らかの支援活動をするということはありません。あるとすれば、当事者に見込まれた隣人が、頼まれて活動をしている場合だ。このマップで言えば、当事者に頼まれてついでに買い物をしたり、買い物に行っただけであり、これも当事者が主導している。

(5)各自の自主独立を大事に。だから各自で努力する必要がある

振り返ってみて、庭木の剪定のできる人を初めに掘り起こし、自分の庭の剪定をお願いした人と話していると、自分から積極的に他の高齢者みんなに教えてあげようという気はないようなのが印象的だった。こちらが、他にもその人をお願いした高齢者はいるかとなると、ようやく「この人」と答える。「ほかには？」「この人」「ほかには？」「この人」…こんな感じなのだ。人のために

動くのは面倒だというのではない。それぞれが自分に適した福祉資源を確保すべきだ。それを私もしたから、あなたもしなさい、という感じではないか。冷たいのではなく、1人ひとりの自主独立を尊重し合っているのだ。

その証拠に、お礼の方はどうしているのかと聞くと、1人ひとりみんな異なるという。相手との人間関係の深まり具合、自分の懐具合、庭の大きさなどで、自分なりの額を換算し、それで相手と交渉をする。このあたりはまったく「主体性」そのものなのだ。全体の傾向に流されず、私は私なのである。

彼らにとって福祉は、自分で考え、必要な資源は自分で調達する。そのための情報探しもする。情報を得たら、あとは私が判断する。その情報探して最も好都合なのが、同じ福祉課題を抱えた人たちとの情報ネットワークなのだろう。といっても付和雷同のためのネットではなく、あくまで私個人のための資源情報の1つと考えているのだ。

5.世話焼きさんの発掘が最大の課題

自助力を発揮している人の特徴の1つは、有力な支援者を1人確保している点である。世話焼きさんであるが、それも大型の世話焼きさんだ。世話焼きさんをうまく確保できれば、自分の問題解決だけでなく、例えば福祉のご近所づくりをしようとするのにも、極めて有利になる。

(1)大中小の世話焼きさんで近所を支えていた

福祉関係者にとって世話焼きさんの存在がいまだに半信半疑なのは、世話焼きさんの行動が水面下で行われているからだ。人を助ける活動はミエミエでやるものではないという住民の基本ルールに則っているからで、ただボヤっと近所を眺めても見えない。マップ作りをしたり、世話焼きさんのすぐ近くでその行動を丁寧に観察しなければ見えないのだ。

次のマップは、民生委員（■）が作ったものである。彼は地区民協の役員で、普段は忙しいのでなかなか足元での住民の助け合いを観察する機会がなかったが、マップを作ってみて驚いた。まず大型の世話焼きさんが2人いる。最下段で10本ぐらいの線が出ている2人だ。そして中型の世話焼きさんが2人。左端と右端に、5本ぐらいの線が出ている2人だ。それだけではない。一人暮らし高齢者と老々世帯のすべてに、周りから各数本の線が入っている。全員が見守られていた。（2～3人に関わっているのが小型

の世話焼きさんだ)

この民生委員は、「これからは周りの大中の世話焼きさんと繋がってればいいんだな」と安心した風だった。ご近所は世話焼きさんたちに任せて、民生委員はご近所と上層の繋ぎ屋になればいい。

もう1つ、面白い事実がある。このマップのいちばん下の大型世話焼きさん2人を比較してみると、大きな違いが判る。左の人は自分から外へ出る線ばかりであるが、右の人は、自分の方に向かう線もかなりある。つまり助けられ上手と助け上手の両方を持っている人なのだ。

それからいちばん上の方に何人か一人暮らしの人がいるが、いずれも複数の人の線が入っている。助けられ上手さんなのだ。

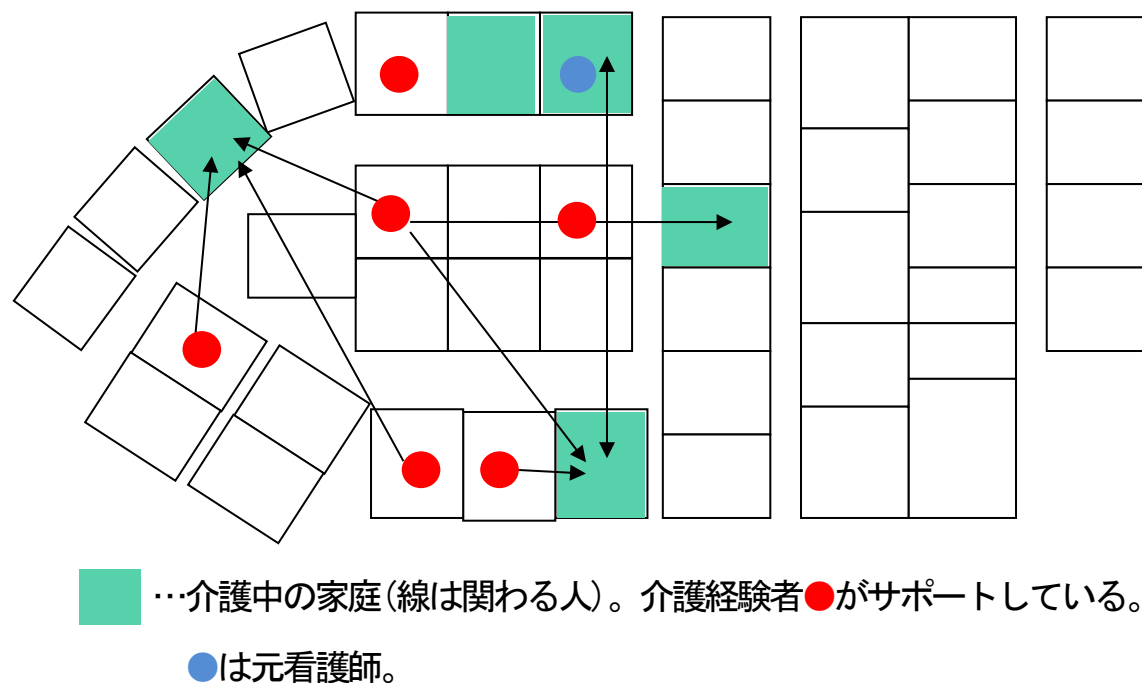
(2)元看護師＋介護者＋世話焼きさんがいれば介護もOK

当事者たちの自助の助け合いは、サポートの部分でかなり重層的であるし、多様性がある。それが当事者を本当にサポートすることにつながっている。まず単純なサポートから入ろう。

①現役に対するOBのサポート

あるご近所で今、5軒が家庭介護をしている。その家を誰かが支えていないか調べてみることにした。まず、この集落で家庭介護を経験した人がどれくらいいるのか。この集落には6軒あった。

もしかして彼らが現役の介護者のサポートをしていないかと調べたら、やはりそうだった。例えば左端の家には3人のOBが関わっている。また、右下の家には2人のOBと1人の現役が関わっていた。



②現役に対する現役のサポート

そのように、いま介護中の人がある他の介護者をサポートする場合、実技指導もやり易いし、お互いにサポートし合えるという利点がある。同じ向こう三軒の間柄ならば、不在中のおむつ替えなどもできてしまう。

那覇市のある女性は、おむつ替えの名人で、要介護5の夫を介護しながら近隣の複数名の介護者の介護も手伝っていた。

③「元看護師＋介護の現役＋世話焼き」の腕を活かせば

もう1つ注目すべきは、●印が付いた人だ。彼女自身も介護中であるが、元看護師としての腕を、この集落の人みんなの相談に乗ることで生かしている。この集落に事実上の診療所があると考えられるほどなのだ。そして彼女は大型世話焼きさんでもある。

興味深いことだが、他の地区でこういう介護のOBが揃った地区のことを話すと羨ましがられるが、実際に元看護師、元保健師、それに家庭介護の経験のある人の家に印をつけていくと、どの地区にもかなりの人がこれに該当することがわかり安心する。

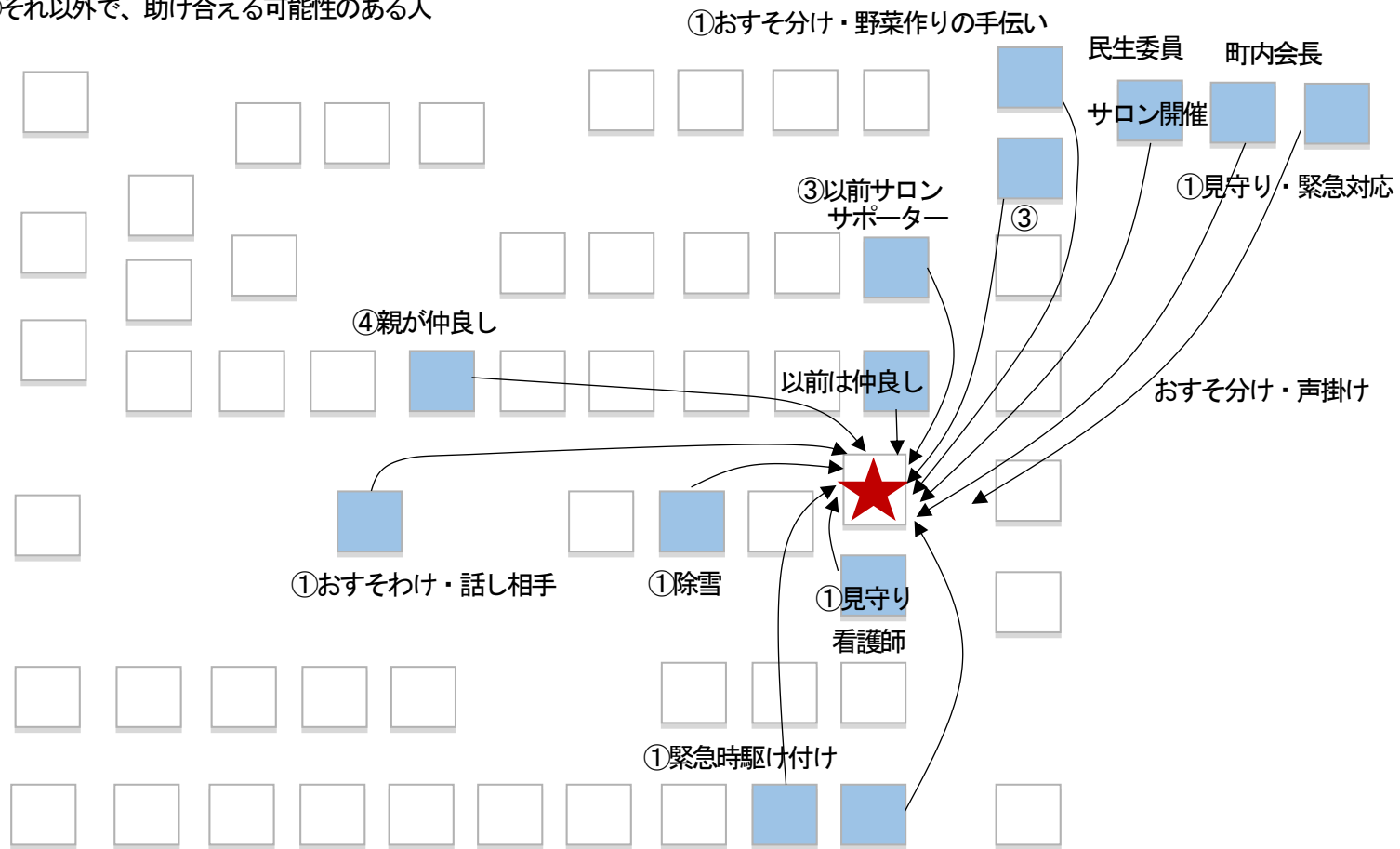
(3)突出した世話焼きさんに運よく巡り合えるか？

40ページで重度障害がある女性の活動を紹介したが、彼女は80歳で一人暮らしで、半身不随のため車椅子に乗っている。彼女が一人暮らしで自立して生きていくだけでも凄いことなのだが、そのうえ、老人ホーム入所者の里帰りを毎月受け入れ、ときどき認知症などの要援護者のサロンまで開催している。これからもやる気十分である。

こういうことができているのは、彼女のサポートをしている民生委員のおかげだと言っても間違いではない。この女性は、じつは助けられ下手さんで、民生委員もいろいろ大変な思いをしているのだが、それでも親身にサポートし続けている。長い間たくさん民生委員に出会ってきたが、彼女以上の人はいない。地元の民生委員仲間がそう言うぐらいなのだ。

次のマップは、この重度障害のある一人暮らし女性の支援者をのせた自助マップだが、この民生委員が言うには、これ以外にも、頼めばやってくれる人ばかりだという。凄いご近所なのだが、そういうご近所にしたのも、この民生委員なのである。

- ①私にとって資源になる人
- ②私が担い手になっている人
- ③これからエリアの仲間に加えたい人
- ④それ以外で、助け合える可能性のある人



6. 息子・娘の近居・遠居ーもっと頼りになる資源に…

最近マップをつくっていて気付くのは、「近居」が増えているという点だ。マップを見ていただきたい。息子や娘が同じご近所内の別の敷地に家を建てて、日常的に親元へ通って来ているケースが18軒見つかった。ご近所にスペースがない場合は、隣接した空き地に、住居を求めている。

URが同じURに近居する場合に、子どもの方の家賃を何パーセントか低くするといったサービスもある。政府ぐるみで近居を応援する方向だが、これは住民の行動ともマッチしているのだ。



(1)母親の隣人に何かお願い事ができるか？

この実態は何を意味しているか。やはり身内の支援は、何にも代えがたいということだろう。既に紹介した「車のない一人暮らし高齢者はどうやって買い物をしているか」のマップを見直すと、やはり息子（娘）が多い。

しかし、今の身内には、大きな課題もある。特に息子の場合、ネットワークは苦手だということだ。つまり、例えば自分の母親の隣人に普段の見守りのお礼をしたり、何かをお願いするといったことができないのだ。これができれば、この近居の可能性は大きく広がるのだが。

(2)独居の母の隣家にお願いの電話を入れる子どもは、ほぼ皆無

例えばマップづくりをすると、一人暮らしの高齢者がたくさんいる。その中に、子どもが他地区から時々通ってくるという事例がいくつかある。たしかに、ときどき母の様子を見に来るのだが、もし災害が起きたらどうするのか。そういう時に他地区から来るのは時間がかかる。だから普段から母のお隣さんに声をかけて、いざという時のこともお願いすればいいのだが、30年間マップ作りをしてきて、子どもが母の隣家にお礼やお願いをしている事例はほんのわずかで、それも決まって女性だ。

先日も高知市で、地域包括支援センターのスタッフが作成した自助マップで見つかったのは、娘2人だけだった。1人は他県から母の隣家に電話をして、様子を見てほしいとお願いしたというケース。もう1つは逆にお世話になっている隣家にお礼の連絡をしているという事例だ。

第3章 住民と当事者の違いは？

(1)当事者意識を持っている人であるかどうか？

一般住民と当事者をどう区分けするのか。その基準は、当事者意識を持っているかどうかということになる。それをいちいちテストするわけではないが、お互いに日常生活で触れ合っているうちにわかってくるのではないかな。

別に意図的に区分けせずとも、一人暮らし高齢者ではなくても庭木の剪定に困っているのなら、その人材を紹介してもいいはずだ。そういうやり取りをやっているうちに、どちらの人なのかが見えてくる。無理して選別する必要もないが、その人が当事者意識を持っているかということは、確認する必要がある。

(2)「私は当事者」と自覚することから

①福祉の当事者と見られたくない、自覚したくない

住民と支え合いマップづくりをしていると、興味深い場面に出くわす。まず「一人暮らし高齢者の家は？」という質問から始め

る。「この家とこの家が一人暮らしだ。この家もそうだね」と、ここまでは順調に進むが、「これだけ？」と私が聞くと、「あ、私もそうだった！」と1人が苦笑いをしながら言い始める。「次は老々世帯にいきましょう」と私が言うと、メンバー全体から笑いがもれる。「なんだ、ここにいる人のほとんどがそうじゃないか！」。

次は「独身の息子と高齢の母のペアは？」となると、だれも手を上げない。「このペアは気をつけてあげる必要があります。母親が認知症になると息子1人では家事と介護を抱えきれず、虐待になるケースもありますからね」などと言いながらメンバーの反応を見ていくと、渋々といった感じで「私の家がそうだ」という声上がる。

「この地区は高齢者ばかりだけど、子どもはいないの？」と聞くと、「みんな、出て行っちゃったよ」。「それでも、戻って来ている人はいないの？」「いるわけないよ」「たとえば、都会へ行って結婚したけど、その後に離婚して子連れで戻ってきた娘さんとか」と私。またメンバーの間から笑いがもれる。「皆さんは出戻り娘なんて言うけど、1人の女性が2人の子どもを連れて戻ってくれば、これで子どもが2人増えるんだよ。ある地区では、150世帯で7家族が離婚して戻ってきた。平均して1人に1.5人の子どもがいるとしたら、子どもが10人も一挙に増えるんだからね」と言うと、ようやく手を上げる人が出てくる。「よし、言っちゃおう。私の家がそうよ」。

私たちがいかに「福祉の当事者」になりたくないかが、これでよくわかるのではないか。「私は福祉の対象者ではなく、担い手の方なのだ」と意地でも思いたい。「当事者」であることから逃げている間に、(自分の抱えている)問題への対処が遅れ、その後、問題が顕在化しても、対策が後手後手に回ってしまう。

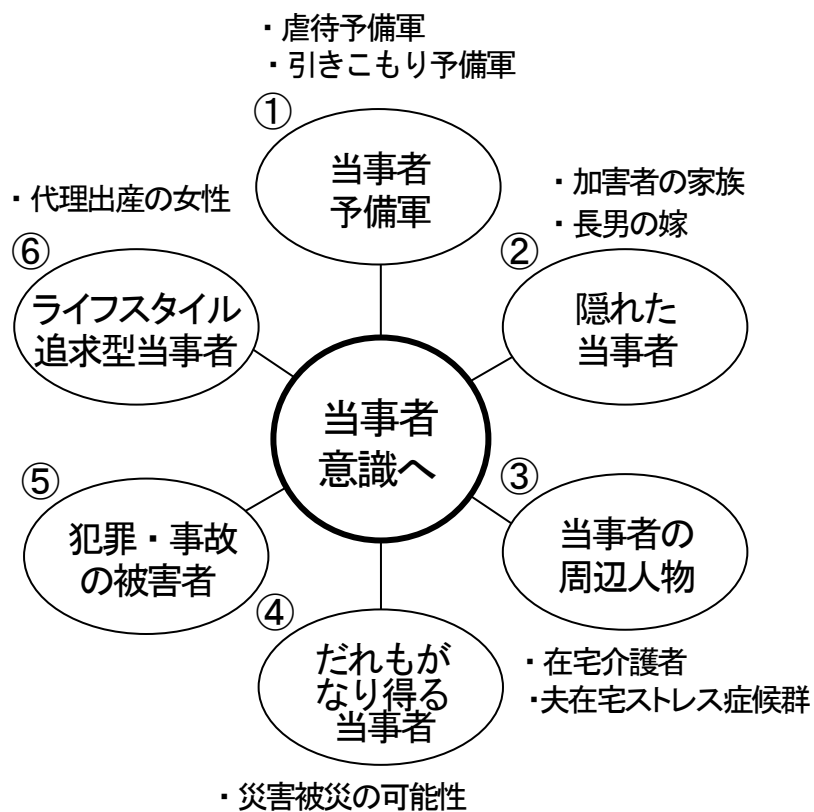
となると、自分は福祉の当事者だと自覚することは非常に重要なことかもしれない。「自分は当事者ではなくて担い手の方なの

だ」と殊更意識したくてボランティア志願する人もいる。ボランティアグループに所属している間は私は「当事者」ではないと思えるのだ。だから、「皆さん、助け合いをしましょう」と言っても、「いいよ、困った人がいたら助けてあげるね」と、ここでも「私は助ける側なのだ」という思いを崩そうとはしない。「困った時は助けてもらうからね」と言う人はまずいないのだ。

②「私は当事者予備軍」という自覚を持てる人たち

図を見ていただきたい。「私は当事者」の自覚が芽生えている分野を6つ並べてみた。

①「当事者予備軍」。まだ当事者にはなっていないが、このままだといずれ「当事者」になる可能性が強いとみてグループが生まれたケース。その他に、②隠れた当事者がいる。「長男のヨメの会」ができているそうだが、自分も一種の福祉の当事者になり得ると考えるお嫁さんがどれだけいるか。



③当事者の周辺人物というのもある。例えば以前は要介護者のケアのことばかりに関心が集中していたが、その人を介護する人も「当事者」なのだという考え方が広がってきている。しかし全国でマップづくりをしていると、まだまだといった感じもする。要介護者について、「だれが介護している？」と聞くと、「ヨメだよ。よく出来たヨメでね」と褒める。しかし「よく出来ていないヨメ」なんてありえない。強制的に「よく出来たヨメ」にさせられているのだ。そして、ヨメが介護していればそれで安心、となる。「おヨメさんも支援しなくっちゃね」と私が言うと、みんなヘンな顔をする。

(3)自分の置かれた状況のどこに当事者性があるのか

④だれもがなり得る当事者、というのもある。住民の参加で災害対策の集会在各地で開かれている。その1つに顔を出したとき、おもしろい光景を目にした。「さあ皆さん、自分の安心カードを書きましょう」と主催者。参加者は手渡された「カード」に記入しようとする時、なにやらテレくさそうな顔をしている。自分に何かあった時のために、住所とか電話、緊急の連絡先などを記入していくものだが、彼等は生まれて初めて、自分が災害時には当事者の1人になり得るのだということに気づかされたといった感じである。

⑤犯罪や事故の被害者のグループ作りが広がっている。特に警察や司法関係者の対処の仕方に納得できない時などに、すぐさまグループが生まれる。当事者の自覚が持ちやすい分野だ。

⑥特定のライフスタイルを選択した人たちのグループづくりも始まっている。アメリカでは有能な女性社長たちの当事者グループ

が生まれている。彼女らに共通するのは「女性で社長」というだけではない。「非婚」でしかも養子縁組で得た子どもを養育している。忙しい仕事の中で子育てもやっていたら、当然、大変なハンディがある。それを乗り越えるために団結した。

子宮を失った女性（27）の受精卵で代理出産した実母（53）が記者会見し、「代理出産を求めている人たちのために、法整備をしてほしい」と訴えた。まだ社会的には合意されていない問題の理解を広めるために「生殖補助医療の支援を求める会」を発足させる。自分の置かれた状況のどこに「当事者」性があるのかを見極めることが大事なのだ。早め早めに「当事者」意識を育てて行動を開始するのが、自分を守るためには良策なのだ。

第4章 当事者によるご近所づくり

ーどこから始める？

1.当事者個々の問題解決を支援

従来の福祉活動のように、組織を作り、活動計画を作り、その計画に沿って、1つ1つ課題を解決していくのは、当事者の活動にふさわしくない。

いちばん手っ取り早いのは、今既に何らかの困り事を抱えている当事者がいるはずなのだから、その問題に取り付くのが先決だ。大抵の場合は、その問題を抱えた人が、そのニーズをもって、地区内を動いているだろうから、それに誰かが対応すればいい。

こういう場合に、地区内にニーズを受け止める人や、それを解決できる人につなげてあげる人がいればいい。

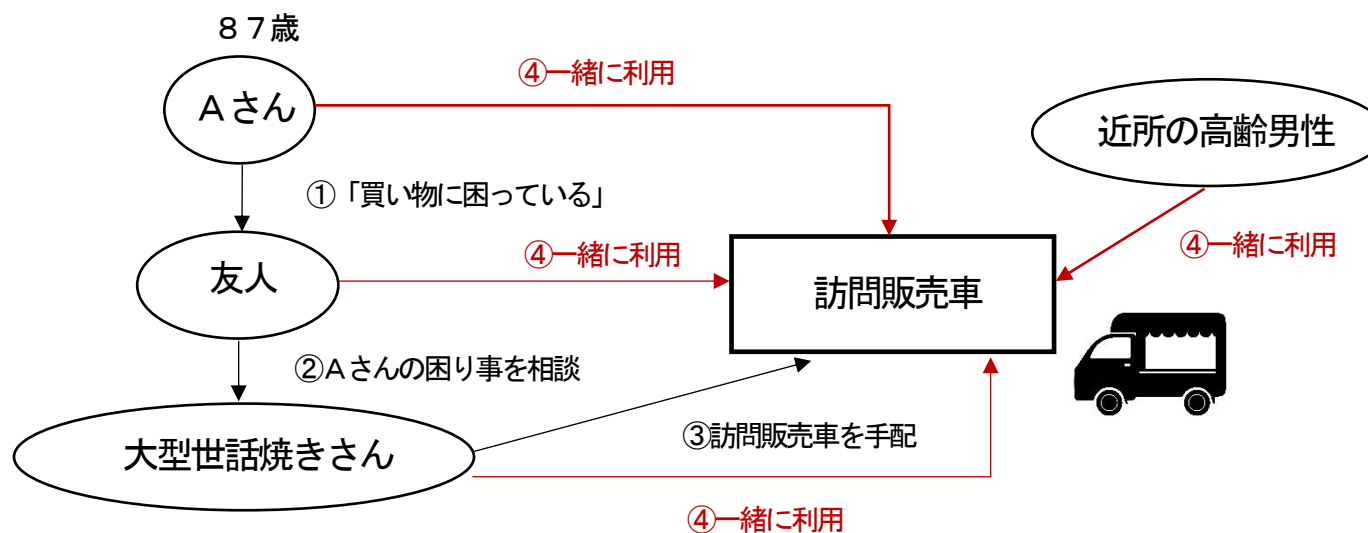
(1)悩み事を周りに打ち明ける発信上手さんと、それをサービスにつなげる仲介上手さん

高知市の地域包括支援センターのスタッフの1人がまとめた自助マップ作りのレポートの中に、こういうのがあった。

「私たちが聴取をしたのは老老世帯の妻だったが、聞き取りが終了した際、玄関を出た私たちをわざわざ追いかけてきて『私、足が弱ってきたと思うのだけど、どうしたらいい?』と訴えてきた。以前も彼女が、『買い物が不便だ』と友人に相談したことがきっかけで、自宅前に移動販売車が週2回、来ることになった。おかげで、この地域の一人暮らしの男性も利用することができた。」

じつは、彼女の悩みを聞いた友人は、大型世話焼きさんに話を持って行った。そして世話焼きさんが移動販売車を手配した。このルートで彼女の悩みがいくつも解決されていた、ということなのだ。図にすると、以下のようなになる。つまり地域に、人の悩みを受け止める人がいて、その人に打ち明けると、その人の知り合いの世話焼きさんに伝わり、その世話焼きさんが解決への手配を

したりしている。今回の場合は、訪問販売車に交渉して、当事者のところに差し向けることができた。



(2)限定版の相談ルートと汎用のルートがある

地域の面倒なところは、ならば地区の人は皆このルートを使えばいい、というわけにはいかないことだ。これはこの人たちに限定された問題解決ルートであって、それぞれが自己努力でこういうルートを開発しなければならないのだ。

そんなことを言ったら、こういうルートの開発が難しくてできないという人は、どうしたらいいのか。今紹介したルートは、特

定の人限定の相談・解決ルートであるが、開かれたルートがあるかもしれない。例えば超大型の世話焼きさんなら、なんでも受けてもらえるということがあるだろう。こういう場合の世話焼きさんは、人の好き嫌いがなく、特別なつながりがなくても受けしてもらえる。汎用の相談・解決ルートだ。

(3)相談ルートの情報だけはオープンにして、あとは自己努力という手も

なんなら当事者たちで、地区内の相談・解決を受け止めるルートを調べてみたらどうか。当事者たちに聞けば、それぞれの独自ルートを教えてくれるかもしれない。これをまとめて皆に配る。あとは本人の努力だ。自分ならこれらのルートのどれが使えるか考え、そして個別交渉するのだ。

このように、相談・解決ルートのすべての面倒を見るのではなく、一部のルートだけを情報化する、そしてあとは自己努力。これならいいのではないか。そういえば、事例で紹介した、庭木の剪定も、請け負ってくれる男性の情報は教えてもらえるが、その人との交渉は個別にやることでうまく行っている。

ということなら、こういう問題と解決の相談ルートと解決のノウハウ全般をご近所内で情報化して、あとは本人の自己努力に待つというあり方も考えられる。

(4)自然発生型・問題解決マーケットはできていないか

もしかしたらこうした人々のさまざまな相談を受け止めて解決策を教えてくれる、いわば問題解決マーケットのような家ないし

は場ができているかもしれない。誰でもそういうマーケットが欲しいのだから、変則的でもそれらしい所ができているのではないか。そこまでいかなくとも、個別に情報交換をする場なら、気の合う当事者同士、井戸端会議や誰かの自宅でお茶を飲みながらなど、行われているし、その中のメンバーが、他のグループの誰かとつながるなどして、ゆるやかなネットワークができたりする。こういう場を意図的に作ればいいのかと考えてしまうが、住民の場合、やはりそれは難しいのだ。

2.当事者グループとして取り組むべき課題

(1)自助マップ作りの中でできること

自助マップ作りは、1人ひとりの作業だが、目的はいろいろあり、提示されているテーマに沿って作業をしていく。

①1つは、いま自分が抱えている課題で、解決しなければならないことが見えてくる。

②自分の今までの生き方を振り返り、今後を見据えることで、これからやるべきことが浮かび上がってくるはずである。

③また、自分が抱えている課題というか、当事者として不足しているもの、やらねばならないことをこのマップ作りで割り出し、この際、集中的にその課題に取り組む。

例えば、こちらができる「お返し」「お礼」の腕を磨いておけば、困った時に人に頼みやすくなる。また、1人の住民として自分がやるべきことはないかもチェックし、やれることはやる。例えば町内会活動に参加していなかったが、これからはできることを何か1つでも担おうとか。

民生委員とじっくり話し合う機会がなかったから、一度みんなで（当事者仲間と）集まり、民生委員を招いて話し合おう、ということもあるだろう。自分の状況を伝えたり、今後どういうことをすれば民生委員として支援しやすいのかといったことを聞き出す。

④ただ福祉課題だけでなく、当事者としてももっと豊かに生きるには、何が欠けているのか、当事者としてそれが充足できるにはどういった努力が必要なのかを皆で話し合う。

⑤これらの話し合いで出てきた当事者に共通の努力目標を、皆で実践する。それを実現できている仲間から体験話を聞く。今後その課題に取り組むためのマニュアルを作成し、各自で実践していく。

⑥自助マップ作りそのものを発展させることもできる。例えば、仲間の自助マップ作りの手伝いをする。そしてこの活動をご近所内で広げていく。そのノウハウが蓄積されていけば、自助マップ作りのサポーターになることもできるし、もっと発展すればマップ作りのインストラクターとして、地域の多くの人への指導もできる。上達していけば、実践者の立場から自助マップのテキストの改善策を提示することもできる。

このノウハウをご近所中に広げて、他のご近所さんたちにも教えていくことができれば素晴らしい。この自助マップを作ることで、当事者意識が育っていくのだから、マップ作りを普及させることがそのまま当事者意識の育成につながるのだ。

(2)自助エリアをどう充実させるか

①お互いの自助エリアを見比べながら、それぞれの長所・短所を指摘し合い、一緒に改善点を考える。

②エリアが他の人と重なっている場合、共同でお願いできる支援者やその他の資源などがないか話し合う。

③まだ開発できていない資源で、可能性のある候補を一緒に探し、共同で活用できないか議論する。(例：買い物できる店がない→このエリアに移動販売車を手配してみんなで利用するなど)

④支援者（移送ができるなど）と、周辺の当事者たちで、話し合いの機会を持つ。

⑤まだ自助エリアを持っていない人に対して、どのような支援が可能か考える。

(3)互助エリアをどう充実させるか

- ①まず互助エリア内でどの程度の自助エリアができているのかを調べる。それによって、ご近所の助け合いに参加できる当事者を割り出す。
- ②支え合いマップを作って、ご近所内の世話焼きさんなどの人材の分布状況を調べ、彼らがどの程度当事者に関わってくれるかを確認する。
- ③出てきた人材がいま現在、具体的にどのように当事者に関わっているのかを調べる。誰かの自助エリアの中に加わっているとか、複数の自助エリアに加わっているとか。または当事者の福祉に直接関わっているとか。
- ④今後、当事者や当事者グループと、支え合いマップで発掘された住民の活動グループがどのように交流、ないしは連携できるかを話し合う。
- ⑤住民が関与しているテーマと、当事者たちが関わっている問題に何らかのつながりがあるのか、あれば、それについて共同活動ができないかを検討する。

(4)共助エリアで、当該ご近所の当事者が活用できる資源を探し出す

- ①当事者が豊かな生活を追究するために必要な趣味・スポーツ・健康づくり・ボランティア・作業または仕事などが楽しめるグループ組織、機関などで、既に当事者が加入しているもの、加入する意味のあるもの、などを掘り起こす。
- ②それぞれの組織・機関が障害や要介護であっても参加できるのか、条件があるのかなどを調べる。この情報をご近所内のメンバ

一に配布する。

③この作業は、まずご近所圏域で実施されなければならない。

④共助圏域に広げた場合、どのような人材がいるのかも調べるといい。この圏域にまで広げると、超大型世話焼きさんもいるはずなので、この人を発掘して支援を依頼するといい。

⑤当事者が活動に参加できる活動グループも探す。要援護でも活動に参加させてもらえるグループを探す。

住民流福祉総合研究所

木原孝久

〒350-0451

埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1 4 7 6 - 1

TEL049-294-8284

kiharas@msh.biglobe.ne.jp

<http://juminryu.web.fc2.com/>
